勉誠社

Benseisha

刊行書籍一覧

2024

国文学
（近現代文学）

日本語・文字論

日本史

仏教関連書籍

東洋史・東洋文化

美術・芸術

図書館情報学・
アーカイブズ学・
書誌学・本の本

ご注文方法

勉誠社 WEB でご注文

弊社ホームページ（https://bensei.jp）にアクセスのうえ、
手順に沿ってご注文ください。迅速・確実です！

勉誠社に直接ご注文

メール・ファックス・お電話などで弊社営業部宛に直接ご連絡ください。
以降のお手続きをご案内いたします。

〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町 2-18-4
電話＝03-5215-9021
FAX＝03-5215-9025
E-mail＝info@bensei.jp

書店様でご注文

ご懇意の書店にご用命ください。全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。
Amazon ほか、各種 EC サイトでもご購入いただけます。

勉誠社
刊行案内
2024
国文学

本 かたちと文化

古典籍・近代文献の見方・楽しみ方

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館［編］

写本、版本、明治期に作られた書籍――
日本の古い本には色々な形があり、それを構成する部品、作られた時代も様式も様々である。これらの「本」には何が書かれているのか。そもそも「本」のどこをどのように見ればよいのか。くずし字はどう読めばよい？捺されているハンコは何を意味しているのか？表紙の模様にはどのような意味が隠されているのか？一流の研究者たちが丁寧にわかりやすく解説する。多数の図版とともに楽しむ、充実の古典籍・近代文献の入門書！ 古典籍研究のエキスパートである国文学研究資料館が定期的に開催し、書物の声を聴くための方法・視角をレクチャーする「日本古典籍講習会」。そこで繰り広げられる連続講義を初めて書籍化。

※フルカラー電子版は勉誠社ホームページからお買い求めいただけます。

A5判並製・288頁・2024年2月刊行
978-4-585-30011-3・定価3080円（税込）

歴史叙述としての平家物語

塩山貴奈［著］

成立以来、さまざまなかたちで広く流布し、社会への大きな効力を持ちつづけてきた『平家物語』。現代にいたるまで、源平の時代にたいするイメージや歴史認識に小さからぬ影響を与え続けているこの物語には、史実とは距離のある叙述がところどころに散りばめられている。実とは異なる「歴史」を語る『平家物語』の歴史叙述とは、いったいいかなるものなのか。何を語るべく成立したものなのか――。平家嫡流たる小松家にかんする描写のありかたや東大寺の勧進聖、俊乗房重源をめぐる中世の言説などを、これまであまり注目されてこなかった事柄や資料などへ着目し、多角的に検討。あらたな角度から史実と虚構を含みこんだ『平家物語』の歴史叙述の相貌を照射する。

A5判上製・288頁・2024年2月刊行
978-4-585-39037-4・定価8800円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
国文学

古典籍の文献学

鶴見大学図書館の蒐書を巡る

編集部［編］

『伊勢物語』、『源氏物語』などの物語、歌集・歌学書、古筆切、仏書、漢籍、洋学資料…。鶴見大学図書館では、文献資料に基づく実証的研究を伝統とし、その時々の教職員の書物に対する深い関心と集書への熱意によって徐々に貴重な古典籍が蒐集されてきた。そのコレクションは全国でも屈指の収蔵点数を誇っており、まさに「宝庫」と呼ぶに相応しい。鶴見大学図書館が70年の長きにわたり、博捜と収蔵に取り組み続け、守り伝えてきた営為とその魅力をあますところなく紹介する。

書物学25・B5判並製・120頁・2024年3月刊行
978-4-585-30725-9・定価2200円（税込）

球陽外巻 遺老説伝

前村佳幸［校注］

18世紀中期、琉球の正史として編纂された歴史書である『球陽』。その外巻である『遺老説伝』には首里王府が全土に指令を下して、各地から収集・報告させた民間説話が漢文体で収録されている。本書は、その全文の校訂文および書き下し文を収録。本文には底本と諸本との字句の異同を示す校注を付し、書き下し文には、関連する事柄を示すために詳細な注を施す。琉球における説話文学研究の基本資料であるばかりではなく、地域の祭祀・伝承・芸能、自然と人文との関係、地名の漢字表記を巡る言語的理解など、多様な視点により、人類学・民俗学や歴史学・地理学など様々な学問領域に重要な意義と必要性を持つ一冊。

A5判上製・264頁・2024年3月刊行
978-4-585-32048-7・定価8800円（税込）

杜甫研究年報
第七号

日本杜甫学会［編］

「詩聖」杜甫。その詩は、それ以前の詩の総括であるとともに、以後の中国詩の出発点でもある。
日本においては、五山の僧の崇敬、芭蕉の傾倒があり、明治以後も、中江兆民・島崎藤村・正岡子規を始め、知識人・国民の間で、その親愛の念は一貫して揺るがないものだった。漢文教育においても、杜甫の詩は教材の中で重要な位置を占めてきた。世界における杜甫への関心を見つめつつ、変転する時の中で無窮の未来に向かって杜甫研究を発展させ続ける一冊。

A5判並製・96頁・2024年4月刊行
978-4-585-39447-1・定価2200円（税込）

日本人は漢文をどう読んだか
直読から訓読へ

湯沢質幸［著］

日本において古代から現在に至るまで延々と読み継がれてきた漢文。その読み方には中国から渡来した中国音で読む〈直読〉、そして、平安時代に生まれ、漢文読解の方法としてその地位を確立した〈訓読〉の二種類が存在する。しかし、古代から現代までの間に〈直読〉は消え、日本語で読む〈訓読〉がもっぱら使われるようになった。なぜ、日本では〈訓読〉優位の状況が生じたのか——。漢文を取り巻く環境を一つ一つ分析することを通して、〈直読〉から〈訓読〉への変化を追い、日本人の漢字漢文受容の歴史を描きだす。

四六判並製・240頁・2024年4月刊行
978-4-585-38006-1・定価3520円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
国文学

戦後出版文化史のなかのカストリ雑誌

石川巧［編集代表］カストリ雑誌編集委員会［編］

戦後占領期の紙飢饉に乗じて登場した仇花のような出版物＝カストリ雑誌。戦後出版文化の領域において必ず言及される事項であり、そのいかがわしさ、偽物性において、まさに戦後占領期を象徴する言葉のひとつとして機能していたものの、その実態については明らかになっていない部分が多くある。戦後、占領軍の検閲が厳しかった時代、大衆通俗雑誌であるがゆえに、人々の欲望の本質と実態を暴くことができ、一世を風靡するほど人気を集めたカストリ雑誌が、なぜどこにも保存されないまま人々の記憶の片隅に追いやられてしまったのか？カストリ雑誌は戦後の雑誌出版文化にどのような役割を果たしたのか？そもそもカストリ雑誌とは何だったのか？カストリ雑誌主要30誌を解説、またそれらにまつわるコラムを収録。戦後占領期におけるカストリ雑誌の全貌を明らかにする。

A5判並製・208頁・2024年5月刊行
978-4-585-39039-8・定価3080円（税込）

新装版
正訳 紫式部日記 本文対照

中野幸一［訳］

女房として仕えた宮廷生活の記録だけではなく、鋭い人物批判と、自己の内面を告白した稀有な日記文学。
紫式部と紫式部日記を理解するための充実の附録付き。平安文学研究の泰斗による本文対照で読める現代語訳！

紫式部日記とは……
親王誕生を中心とする宮廷行事、自己の反省や告白をもつづる深い人間性などが記された、『源氏物語』作者による、唯一の生活記録。女流日記文学の傑作として必読の書である。

※本書は『正訳　紫式部日記　本文対照』（2018年7月刊行）の新装版です。

四六判並製・240頁・2024年6月刊行
978-4-585-39041-1・定価2420円（税込）

近世長崎渡来人文運史

言語接触と文化交流の諸相

若木太一[著]

近世日本において、東アジア各地より渡来した異国人たちは、さまざまな分野において多大な影響を与えた。通事（通訳）となった者、詩を通し日本の文人たちとかかわった者、政治的に活躍した者…。異国人たちはどのように日本で活躍し、どのような思想、文学作品を遺したのか。彼らがたどり着いた「長崎」という場を軸に、様々な資史料を検証し、文化交流の諸相を明らかにする。

A5判上製・704頁・2024年6月刊行
978-4-585-32044-9・定価14300円（税込）

広益体 妖怪普及史

伊藤慎吾・氷厘亭氷泉・式水下流
永島大輝・幕張本郷猛・御田鍬・毛利恵太[著]

現代一般に認識されている妖怪のイメージはいつどのように形成され、どのように普及してきたのか。それは自然の流れだったのか、恣意的なものだったのか。
妖怪を探し出した「研究者と妖怪」、それを普及させた「紹介者と妖怪」、そして新たに創作をしていく「創作者と妖怪」という3つの視点から、多角的に考察。近年ブームとなっている妖怪本とは一線を画し、妖怪学のウラに潜む、「妖怪の情報」の流れを多彩な切り口で徹底追跡！！ 2024年2月までに刊行された書籍から妖怪に関する1111冊を選定した「妖怪ブックガイド1111」も付す。大好評『列伝体　妖怪学前史』（2021年刊行）に続く第2弾！！

小松和彦氏、推薦！！
本書は妖怪研究が新しい段階に入ったことを告げる、妖怪関係者必読の書である。

A5判並製・504頁・2024年7月刊行
978-4-585-32040-1・定価3520円（税込）

源氏絵研究の最前線

稲本万里子[編著]

『源氏物語』を絵画化した作品である源氏絵は、平安時代から現代に至るまで数多く制作された。これらは、歴史上、天皇や公家、武家、あるいは寺院の僧侶たちの私的な空間を彩る絵であったため、彼らの生活を知るためには、欠くことのできない作品である。そして、その制作には土佐派や狩野派などさまざまな流派が関わり、流派を超えた同時代の潮流や、あるいは時代を超えた流派ごとの様式展開を知るための重要な作例でもある。絵巻や扇、画帖、?風など、さまざまな形で残されてきた作品を、美術史、建築史、日本文学などの知見より時代別に考察。さらには、AIやVRなどを駆使した最先端の研究や展示方法に関する最新成果も収載。日本古典文化の中心にある『源氏物語』の絵画の世界を多角的視点から解剖した必備の一冊。図版点数360点超！

B5判上製・488頁・2024年10月刊行
978-4-585-37016-1・定価14300円（税込）

日本中世史論集

森茂暁[著]

鎌倉時代から南北朝期、さらには室町時代にいたる日本中世の政治と文化の諸相を、新史料を含む多様な史料を駆使し考究。中世史を考えるうえでの基盤を提示する。長年、日本中世史研究を領導してきた著者による待望の一冊！

A5判上製・688頁・2024年9月刊行
978-4-585-32053-1・定価13200円（税込）

増補改訂版
明恵上人夢記 訳注

奥田勲・平野多恵・前川健一［編］

鎌倉仏教に異彩を放つ僧・明恵の精神世界を探る基礎資料。中世の歴史・信仰・美術・言語、ひいては広く日本文化を解明するための画期的成果。2015年に刊行後、早々に品切となった同書を増補改訂。新出の夢記4点を含む増補改訂を施した決定版！
高山寺以外の各所に分散所蔵されており、全体を見渡しての研究が困難であった明恵上人の山外本「夢記」をはじめて網羅的に収集。それらの影印・解題・目録及び夢記一点ごとの翻刻・訓読・現代語訳・考察を収載した、明恵上人夢記研究における画期的な基礎文献である。・夢・思想・宗教・歴史などの分析・検討に広く有用な資料を提供し、文学・思想・宗教・歴史・心理学・精神医学・日本語学・古筆学・美術等、さまざまな研究分野に裨益する必携の一書。

A5判上製・580頁・2024年11月刊行
978-4-585-31019-8・定価8800円（税込）

鎌倉幕府の文学論は成立可能か!?
真名本『曽我物語』テクスト論

神田龍身［著］

武士団の世界観、東国ならではの恋物語、縁起や唱導の言葉の引用、頼朝と曽我兄弟の弟・五郎との熾烈な言葉の応酬などの言語的実験…中世東国のなんたるかを如実に体現した範例的・普遍的テクストであると言える真名本『曽我物語』。そしてなによりも「歴史テクスト」としての自らを押し出したのが真名本という物語ではないのか。一方、真名本と同じ事件を取材しながらも、まったくの反対方向を志向している『吾妻鏡』の歴史テクストを歴史たらしめる言葉の構造とは何なのか。真名本『曽我物語』と『吾妻鏡』という二つの作品の関係論、また『金槐和歌集』や『新古今和歌集』、『神道集』、『太平記』などさまざまなテクストを比較することにより、鎌倉時代における文学の言語空間について考察する。

四六判上製・368頁・2024年10月刊行
978-4-585-39045-9・定価4180円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
国文学

平安朝詩文論集

後藤昭雄［著］

平安朝において漢詩文は、学問の中心として大きな位置を占めていた。国家儀礼はもとより、官吏登用試験、公的な宴の場や歴史書編纂、さらには宗教の場などにおいても、漢学の素養の有無がそこに関わる人物の評価に大きく関わるものであった。平安朝の文人たちが残した漢文資料の一文字一文字と真摯に向き合い、内容を読解。彼らの学問環境、史的位置づけと重ね合わせることで、平安朝の漢詩文をめぐる歴史的状況を明らかにする。長年に亙って平安朝の漢文学研究に携わってきた著者の最新論文集。

A5判上製・528頁・2024年9月刊行
978-4-585-39043-5・定価13200円（税込）

日本古典文学と中国の古伝承
物語形成の比較文学的考察

三木雅博［著］

『古事記』『竹取物語』『うつほ物語』『伊勢物語』などの史書や物語、さらには説話集や唱導、説経など日本古典文学に登場する様々な物語には、孝子譚（儒教の重要な徳目である親孝行に関する説話）や韓朋譚（横暴な皇帝に苦しめられる夫婦の悲恋の物語）などの中国の古伝承の影響を認めることができる。これら中国の古伝承は、早く奈良時代には日本に伝来し、日本人にも旧知の物語となっていた。日本古典文学において新たな物語が創造される際に、これら旧知の物語はいかなる影響を与えたのか――。東アジア諸地域の資料を博捜し、比較文学的視点より日本古典文学と中国の古伝承の影響関係を追及、物語形成の局面を描き出す。

A5判上製・344頁・2024年10月刊行
978-4-585-39042-8・定価11000円（税込）

日本人にとって教養とはなにか

〈和〉〈漢〉〈洋〉の文化史

鈴木健一［著］

古来、人びとはより良い生き方を求め、より広い世界へとつながっていくために、さまざまな文化や知識と触れ合い、まじりあう中で社会とその規範を作り上げてきた。奈良時代以前から現代にいたるまで、日本人が「人としてどう生きるか」を模索してきた歴史を、日本由来の文化である〈和〉、中国由来の文化である〈漢〉、そして欧米由来の文化である〈洋〉の交錯の中から描き出す画期的な一冊。

四六判並製・392頁・2024年10月刊行
978-4-585-39044-2・定価3850円（税込）

天文文化学の視点

星を軸に文化を語る

松浦清・真貝寿明［編］

天文現象は古代より人々の生活や文化活動に密接に関わり、文学や美術に広く取り入れられるとともに、現代科学の発端ともなった。古典籍・美術品・工芸品・遺跡・数式等の中には天文に関わる多様な表現がみられ、それらはさまざまな角度から考察することができる。銅鏡の文様に見られる古代中国の宇宙観とは？浦島太郎のタイムトラベルの理論物理学的な可能性とは？一条兼良はどのような星空を見ていたのか？沖縄に伝わる神歌に歌われた星に、人々は何を託していたのか？絵画・文学作品、信仰・思想、民俗、実際の天体現象など、様々な視点から、文化史と科学論を統合して自然観を考察する。細分化され過ぎた現在の学問を新たに捉え直し、総体としての知を確立する挑戦！

アジア遊学296・A5判並製・320頁・2024年10月刊行
978-4-585-32542-0・定価3850円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
国文学

廃墟の文化史

木下華子・山本聡美・渡邉裕美子［編］

近代産業遺産、廃業した遊園地やホテル、廃村や廃校など、現代において「廃墟」はたびたびブームとなり、人々の心を強く惹きつける。そしてひとたび、古典の世界に目を向ければ、古都や古代寺院の遺構、絵画・記録・物語や伝承などに遺された荒廃した町並みや建造物など、さまざまな廃墟表象が見いだせる。「廃墟」はなぜ描かれ、語り継がれたのか。そこにはどのようなイメージ、意図が込められていたのか。人々は「廃墟」に何を託したのか――。これまであまり考察されることのなかった、日本の廃墟表象を捉え直し、文学・美術・芸能など様々な視点から、古代以来連綿と人々が廃墟と共存した様相や、廃墟が文化の再生・胚胎を可能とする機能的な場であることを明らかにする。日本の歴史・文化史に立脚した廃墟をめぐる新たな視座を提供する挑戦。

アジア遊学297・A5判並製・288頁・2024年11月刊行
978-4-585-32543-7・定価3300円（税込）

無住道暁の拓く鎌倉時代

中世兼学僧の思想と空間

土屋有里子［編］

『沙石集』、『雑談集』などの説話集編者として知られる無住道暁（むじゅうどうぎょう、1226～1312。鎌倉時代後期の遁世僧）。近年、無住の修学面に関する新資料が公になり、その研究も大きく飛躍しているが、彼自身の人生を諸分野から概観する書籍はない。彼はいつどこで誰に出会い、どのような教えを受け、何を選択したのか。鎌倉時代を代表する説話集は、無住のいかなる人生を投影して作られたのか。無住が生きた土地・場、各地での僧侶間ネットワークに着目し、宗教者としての内実を読み解くと同時に、無住をとりまく文芸活動を考察。鎌倉幕府や北条氏にも高い関心を寄せた無住の修学・文学を、彼の人生の流れに沿ってとらえ直す。

アジア遊学298・A5判並製・216頁・2024年11月刊行
978-4-585-32544-4・定価3080円（税込）

看聞日記とその時代

好奇心旺盛な皇族・伏見宮貞成が語る中世社会

薗部寿樹［著］

室町時代史研究における第一級史料『看聞日記』。その日記には貧乏な皇族・伏見宮貞成が京都近郊の村落・伏見に移り住んで見聞きした中世社会のありようが事細かに記録されている。将軍足利義教が暗殺された嘉吉の乱の内幕、僧侶の犯罪、猿楽の鑑賞や酒宴、怪異や怨霊と陰陽師の活躍など――。33年分の日記のなかから、政治・思想・社会・文化・習俗に関する興味深いエピソードを選出。読みやすい現代語訳とわかりやすい解説で楽しむ一冊。

四六判並製・344頁・2024年10月刊行
978-4-585-32059-3・定価4620円（税込）

近世日本邪正論

江戸時代の秩序維持とキリシタン・隠れ／隠し念仏

大橋幸泰［著］

近世日本で絶対的な「邪」とされた「切支丹」という言葉とそこから派生したイメージは、近世人の秩序意識をいかに支え、当該期の国家や社会にどのような矛盾をもたらしたのか――。禁教下の江戸時代において、キリシタンたちは、潜伏活動のほか、寺や神社の活動に参加するなど複数の宗教属性をもち、さらに村民という世俗的属性をもって暮らしていた。潜伏キリシタンや隠れ念仏・隠し念仏など、近世日本の潜伏宗教をめぐる動向に焦点を当て、村社会でキリシタンと非キリシタンという諸属性が共存していた実態を示すとともに、治者がキリシタン禁制による社会秩序を維持するための諸政策をどのように行い、被治者がそれらをどのように受け止めたのか明らかにする。さらに、その近世秩序がしだいに解消され、異質な諸属性の共存状態も解体していく過程を跡付ける。

A5判上製・368頁・2024年11月刊行
978-4-585-32058-6・定価11000円（税込）

清少納言伝

中宮定子讃仰と鎮魂の生涯

上原作和［著］

清少納言はなぜ『枕草子』を書いたのか。中宮定子への忠誠心とはいかなるものだったのか。紫式部とは仲が悪かったのか。多彩な史料・文献を駆使して、幼少時代、恋愛と結婚、宮廷生活、長徳の変の伊周と高階道順の逃亡への関与、晩年の隠棲地のほか、『枕草子』の成立と享受について14の新見解を提示し、その波乱に満ちた生涯と人物像に迫る。和歌・漢文日記等に読みやすい現代語訳、専門用語に注記を付した。

A5判並製・416頁・2024年11月刊行
978-4-585-39046-6・定価5940円（税込）

日本人の読書 新装版

古代・中世の学問を探る

佐藤道生［著］

古代・中世の日本において、書物を読み、解釈し、伝えていくことは、限られた人びとにのみ許される特権的な営みであった。特に中国大陸ないしは朝鮮半島経由で伝えられた漢籍（漢語で書かれた書物）は、国家を支える政治や法、さらには思想や文化体系を伝える最先端のものとして重要視された。中国の文化全般を学ぶことを目的としたこれらの学問―漢学―は、国家の制度のなかにも位置付けられ、それを担う家では、書写・刊行された諸種の漢籍を入手し、独自の学問を形成していった。書物に残された注釈の書き入れ、来歴を伝える識語、古記録や説話に残された漢学者の逸話など、漢籍の読書の高まりをいまに伝える諸資料から古代・中世における日本人の読書の歴史を明らかにする。
貴重資料の図版収録点数総50超！

※本書は『日本人の読書』（2023年9月刊行）の新装版です。

A5判並製・520頁・2024年12月刊行
978-4-585-39047-3・定価11000円（税込）

川端康成の曖昧な声

日本語の小説における文体と身体の交点

平井裕香［著］

排尿で局部が痛む時の「ああ」、父親が滑落する瞬間の「ああつ」――川端康成の小説は、読む目の奥へ喰い入って身体に響き渡るような声で満たされている。身体から否応なく溢れ出るうめきや叫び。それは必ずしもそれを聞いた人に聞かせるために発された言葉ではない。一対一の・直線的な関係から逸れたところで言葉が受け止められることは、川端の小説において常態化した現象なのだ。
文体と身体、書き手と主人公、語る／語られる私、現実と虚構、自己と他者――。かつて大江健三郎も言及した川端文学の「曖昧さ」を、戦前／戦後を横断する文学批評の変遷や、日本語のもつ多義性とその効果を見据え考究する。

A5判上製・304頁・2024年3月刊行
978-4-585-39038-1・定価6600円（税込）

戦後出版文化史のなかのカストリ雑誌

石川巧［編集代表］カストリ雑誌編集委員会［編］

戦後占領期の紙飢饉に乗じて登場した仇花のような出版物＝カストリ雑誌。戦後出版文化の領域において必ず言及される事項であり、そのいかがわしさ、偽物性において、まさに戦後占領期を象徴する言葉のひとつとして機能していたものの、その実態については明らかになっていない部分が多くある。戦後、占領軍の検閲が厳しかった時代、大衆通俗雑誌であるがゆえに、人々の欲望の本質と実態を暴くことができ、一世を風靡するほど人気を集めたカストリ雑誌が、なぜどこにも保存されないまま人々の記憶の片隅に追いやられてしまったのか？カストリ雑誌は戦後の雑誌出版文化にどのような役割を果たしたのか？そもそもカストリ雑誌とは何だったのか？カストリ雑誌主要30誌を解説、またそれらにまつわるコラムを収録。戦後占領期におけるカストリ雑誌の全貌を明らかにする。

A5判並製・208頁・2024年5月刊行
978-4-585-39039-8・定価3080円（税込）

勉誠社
新刊案内
近・現代文学
2024

世界の絵本・作家 総覧

**O.L.V.（おおぶ文化交流の杜図書館ボランティアグループ）
おおぶ文化交流の杜図書館［編］**

絵本大国アメリカ、イギリスはもとより、アジア、中南米諸国、アフリカといった、これまで紹介される機会が少なかった地域も含め、約80カ国の絵本・作家を15のセクションに分けて紹介。19世紀から現代にわたる総勢900名以上の絵本作家の略歴と、翻訳されている作品のリストを掲載。また、昔話や民話、各国を舞台にした絵本のリストなども収録。世界の絵本・作家を一望できる待望の一冊、ここに刊行！

B5判上製・1240頁・2024年6月刊行
978-4-585-30013-7・定価22000円（税込）

ラテンアメリカ文学の出版文化史

作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成

寺尾隆吉［編著］

カブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』、フアン・ルルフォ『ペドロ・パラモ』、フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』…。文学史に名を残す作家たちの作品はどのように刊行・宣伝され、スペイン語圏のみならず、世界中でブームを巻き起こしたのか？各国の出版事情や、書籍・雑誌の流通を考察することで、ラテンアメリカ文学が国際的に認識されていく過程を解き明かし、創作のあり方のみならず、出版文化史における編集者や出版社の役割を詳述した画期的な一冊。

A5判並製・320頁・2024年5月刊行
978-4-585-39040-4・定価6050円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024

日本語学・言語学・文字論

訂正新版
図説 書誌学
古典籍を学ぶ

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫［編］

有史以来蓄積されてきた「書物」は、人間の英知・思想・思考・情感といった精神活動が、最も明瞭に集約・表出されたかたちで伝承されてきた、学術文芸の遺産である。この「書物」は、なぜここにこのように存在するのか——。「書物」との真摯な対話により、過去から現在、そして未来へと連なる人間の知的営みの一端に自らリンクすることが出来るのである。昭和35年の開設以来、書誌学の専門研究所として学界をリードしてきた斯道文庫所蔵の豊富な古典籍の中から、特に書誌学的観点から重要なものを選出。豊富なカラー図版・解説を通覧することで、書誌学の理念・プロセス・技術を学ぶことが出来る。巻末には「書誌学用語索引」を附し、レファレンスツールとしても充実。古典籍を知る資料集として必備の一冊。掲載図版270点以上！

※本書は『図説　書誌学』（2010年12月刊行）の訂正新版です。

A4判並製・224頁・2023年11月刊行
978-4-585-30010-6・定価3850円（税込）

楷書の秘密
「字様」が発見されるまで

西原一幸［著］

類似する楷書を広く弁別するために編纂された典籍「字様」。字書とは異なる性格・構成をもつそれは、科挙制度とも深く結びつきながら楷書字形のあるべき姿を決めていった。
筆者の発見した典籍『正名要録』『群書新定字様』の精査から浮かんでくる「字様」という概念を紹介する。また『説文解字』の検討により、楷書の歴史を整理し、字体の規定の有り様を明らかにするとともに、「楷書」という東アジア漢字文化圏を支える文字体系の解明を目指す。

四六判並製・208頁・2024年2月刊行
978-4-585-38005-4・定価4180円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
日本語学
文字論

論究日本近代語
第3集

日本近代語研究会［編］

広義の日本近代語における歴史と構造を、文字・表記、文法、語彙、表現、対照研究等の日本語学的観点から詳細に考究した、日本文学、日本史学、日本語教育学、表現論などの分野にも資する論文集。

A5判上製・424頁・2024年4月刊行
978-4-585-38523-3・定価16500円（税込）

日本人は漢文をどう読んだか
直読から訓読へ

湯沢質幸［著］

日本において古代から現在に至るまで延々と読み継がれてきた漢文。その読み方には中国から渡来した中国音で読む〈直読〉、そして、平安時代に生まれ、漢文読解の方法としてその地位を確立した〈訓読〉の二種類が存在する。しかし、古代から現代までの間に〈直読〉は消え、日本語で読む〈訓読〉がもっぱら使われるようになった。なぜ、日本では〈訓読〉優位の状況が生じたのか——。漢文を取り巻く環境を一つ一つ分析することを通して、〈直読〉から〈訓読〉への変化を追い、日本人の漢字漢文受容の歴史を描きだす。

四六判並製・240頁・2024年4月刊行
978-4-585-38006-1・定価3520円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024
日本史

勉誠社
新刊案内
2024
日本史

01

日本近世史入門

ようこそ研究の世界へ！

上野大輔・清水光明・三ツ松誠・吉村雅美［編］

現代を生きる私たちから少し遠いが、遠すぎない時代――近世。
近世の人々の息遣いを伝える史料はそこかしこに残されており、幕藩権力・朝廷から民衆までの様々な視点、政治・経済・対外関係・宗教・思想・ジェンダー・環境といった様々な関心からアプローチすることが可能である。新たな出会いの宝庫である日本近世史（織豊期・江戸時代）の魅力を伝えるために、各研究テーマの来歴や現状のみならず、論文執筆のノウハウ、研究上の暗黙知、さらには秘伝（？）までを余すところなく紹介。残された史料と対話し、時代をこえて多様な生き方や考え方に向き合うための方法論を伝授する。
近世への扉を開くカギはここに用意されている！

［好評二刷！］

A5判並製・420頁・2024年2月刊行
978-4-585-32034-0・定価4180円（税込）

02

コレクションと歴史意識

十九世紀日本のメディア受容と「好古家」のまなざし

古畑侑亮［著］

ヒト・モノ・情報の流通が成熟していった十八世紀半ば、それらをひたすらに集め、記録し、事物の起源・沿革に想いを馳せる人々が各地に現れてきた――彼らは「好古家」と呼ばれ、明治の世を迎えてからもその関心を失うことはなかった。ときに新聞・雑誌に載って共有・発信されたその営為の痕は、いまも刊行物やコレクションとして遺され、歴史学をはじめとした人文学研究の基盤となっている。
幕末・明治という転換の時代を生きた一人の「好古家」に視座を置き、彼が遺した書簡や紀行文、編纂物を手がかりとしてそのコレクションを紐解く。そこから見えてくるのは、蒐集活動の実態と古いものへ注がれた熱いまなざしである。大学という制度や学知が確立する以前の在野における歴史研究の実相とアカデミズムへの継承を描き出す画期的著作。

A5判上製・408頁・2024年2月刊行
978-4-585-32038-8・定価11000円（税込）

03

古文書修復講座

歴史資料の継承のために

神奈川大学日本常民文化研究所［監修］
関口博巨［編］

日本においては、歴史を伝える資料、特に古文書・古記録などの紙の資料が多く残されている。これらは博物館や資料館、図書館などで管理されているもののみならず、民家の母屋や土蔵の奥深く、さらには襖の中の下張りとして残され、虫損・破損・水損など、さまざまなリスクに囲まれている。傷んでしまった紙資料にはどのように対処するのか。また、それらの資料はどのように整理するのか。
長年にわたり、古文書の調査のみならず保存・整理の方法論を検討し、歴史資料の取り扱いかたのレクチャーを行ってきた神奈川大学日本常民文化研究所のノウハウ・知見を、豊富なカラー写真とともに余すところなく紹介。
博物館・資料館・図書館等、古文書を取り扱う方々に必携の書。

B5判並製・192頁・2024年2月刊行
978-4-585-32035-7・定価4180円（税込）

04

近世後期の海防と社会変容

清水詩織［著］

近世後期、相次ぐ異国船の来航に対して、人々はどのように対応したのか。日本各地で構築された海防（海岸防備）体制に焦点を当て、藩と地域社会の両面からその実態を明らかにする。幕府に対する軍役としての海防と個別領主の領地を自衛するための自領海防との違いを考察するとともに、人びとがどのような意識で海防に従事し、既存の社会秩序がどのように変容していったのかを鮮やかに描き出す。幕藩研究に一石を投じる意欲作。

A5判上製・392頁・2024年2月刊行
978-4-585-32037-1・定価11000円（税込）

歴史叙述としての平家物語

塩山貴奈［著］

成立以来、さまざまなかたちで広く流布し、社会への大きな効力を持ちつづけてきた『平家物語』。現代にいたるまで、源平の時代にたいするイメージや歴史認識に小さからぬ影響を与え続けているこの物語には、史実とは距離のある叙述がところどころに散りばめられている。実とは異なる「歴史」を語る『平家物語』の歴史叙述とは、いったいいかなるものなのか。何を語るべく成立したものなのか――。平家嫡流たる小松家にかんする描写のありかたや東大寺の勧進聖、俊乗房重源をめぐる中世の言説などを、これまであまり注目されてこなかった事柄や資料などへ着目し、多角的に検討。あらたな角度から史実と虚構を含みこんだ『平家物語』の歴史叙述の相貌を照射する。

A5判上製・288頁・2024年2月刊行
978-4-585-39037-4・定価8800円（税込）

彰義隊士の手紙

続『新彰義隊戦史』

大藏八郎［著］

彰義隊は明治期のマスメディアで「幕末の花」と謳われながら、大正以降、長きにわたり官軍史観によって幕末維新史の彼方に葬り去られた。『彰義隊戦史』編著者・山崎有信の御子孫のもとに残された旧隊士たちの手紙を解読することで彰義隊の実態と全貌に迫る！元彰義隊士達からの手紙に加え、所縁の人々、戦友である新選組の近藤・土方の手紙、上野戦争で敵方だった西郷隆盛、江藤新平の書簡も読み解く。付録として、今回新たに発掘された丸毛利恒の漢詩十二編と彰義隊に関わる諸名士の漢詩文十七編を書き下し、現代語化、解説することで現代に生き返らせた。また彰義隊士を主人公とする著者の創作、加えて司馬遼太郎作品の「彰義隊胸算用」批判を収録。

B5判上製・992頁・2024年3月刊行
978-4-585-32036-4・定価22000円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
日本史

器と信仰

東アジアの舎利荘厳をめぐる 美術史・考古学からのアプローチ

加島勝［編］

釈迦の遺骨として、アジア各地で篤い信仰を集める「舎利」。その容れ物である舎利容器は、特定の用途を持つ器形や、別の文脈で意味を成した図像が複合的に組み合わされ、舎利を荘厳する器として仕立て上げられた。それゆえ、「器のかたち」――どこで、どのような器の形状・素材・図様が採用されてきたのかという問題は、「舎利の意味」――舎利が各地域の社会においてどのような存在として受容されたのかということと相関関係を有している。中国・日本・韓国・ベトナムの実地調査を礎とした、舎利及びその荘厳に関する最新の知見を提示。また、資料編では、現地調査にて得られた作例の基礎データ、また、舎利荘厳における大きな画期である仁寿舎利塔の網羅的調査記録を提示、貴重な画像資料も収載した。美術史学界・考古学界のみならず、日本及び東洋の文化史に関わる領域に広く寄与する画期的成果。

B5判上製・460頁・2024年3月刊行
978-4-585-32041-8・定価16500円（税込）

湖北省留日学生と明治日本

王鼎［著］

明治期に日本へ派遣された中国人留学生たちは、どのような目的で来日し、どのような行動をとっていたのか。彼らの活動や日本で学んだ知識・思想は、日中両国間の政治・外交・文化交流にどのような影響を与えたのか。これまで、湖北省から大量の学生を日本へ送り出した張之洞の功績については注目されてきたが、湖北省留日学生の人生とその軌跡については、いまだ歴史の中に埋もれたままである。本書では、彼らが日本留学に至った経緯から留学中の生活、同郷会の雑誌・教科書の出版や翻訳活動、留学制度と留学生受け入れの実態、さらには軍事系留学生と辛亥革命の関係までを、徹底的に究明。豊富な史料とフィールドワークに基づき、多角的視座から分析と考察を加え、従来の日中留学生史研究に新たな光を当てた待望の新機軸。武漢大学・馮天瑜教授推薦！

A5判上製・376頁・2024年3月刊行
978-4-585-32043-2・定価7700円（税込）

「見える」ものや「見えない」ものをあらわす

東アジアの思想・文物・藝術

外村中・稲本泰生［編］

「見える」／「見えない」を論じること、それらを描き出すこと——。宗教や思想、芸術などの人間の営みは、このことが大変重要かつ普遍的なテーマであることを示している。東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、「見えるもの／見えないもの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求。宗教・思想をはじめ、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ様々な論点を、最先端の研究者24名の視角により提示する画期的論集。

B5判上製・746頁・2024年3月刊行
978-4-585-37012-3・定価15400円（税込）

三井大坂両替店の顧客信用情報

享保一七年から明治二年まで

萬代悠［編］

三井家の元祖・三井高利は、江戸呉服店開業ののち、呉服の仕入れを円滑にするために、為替・両替・融資業務を担当する両替店の設置を進めた。両替店成功の背景には、「融資を確実に回収できるのかどうか」を判断するための信用管理システムがあった——。これまで全貌が明らかにされてこなかった、享保17年（1732）から明治2年（1869）まで三井大坂両替店の信用調査書を翻刻し、参照・検索しやすいようデータベース化して収載。調査対象件数は実に3,108件、複数人が連印で借入を希望した場合も多々あり、それらを含めると調査対象人数は3,825名にも及ぶ。大商人から借家人に至るまで、大坂両替店の手代が入念に調べた顧客の提供担保（所有する家屋敷や品物）や年齢、家族構成、人柄、業種、家計（経営）状態を知ることができる必備のレファレンスツール。

B5判並製・768頁・2024年3月刊行
978-4-585-32042-5・定価16500円（税込）

球陽外巻 遺老説伝

前村佳幸［校注］

18世紀中期、琉球の正史として編纂された歴史書である『球陽』。その外巻である『遺老説伝』には首里王府が全土に指令を下して、各地から収集・報告させた民間説話が漢文体で収録されている。本書は、その全文の校訂文および書き下し文を収録。本文には底本と諸本との字句の異同を示す校注を付し、書き下し文には、関連する事柄を示すために詳細な注を施す。琉球における説話文学研究の基本資料であるばかりではなく、地域の祭祀・伝承・芸能、自然と人文との関係、地名の漢字表記を巡る言語的理解など、多様な視点により、人類学・民俗学や歴史学・地理学など様々な学問領域に重要な意義と必要性を持つ一冊。

A5判上製・264頁・2024年3月刊行
978-4-585-32048-7・定価8800円（税込）

増補改訂版

図像学入門

疑問符で読む日本美術

山本陽子［著］

麗子像はどうしてあんなこわい顔？ 足なし幽霊は応挙から？ 釈迦の托胎は「受胎告知」と似てる？ 絵画や仏像などのさまざまな疑問・謎を図像解釈学（イコノロジー）から探り、日本美術の新しい楽しみ方を提案する。新たに8つのトピックを追加し、増補改訂版として刊行。

※本書は『図像学入門——疑問符で読む日本美術』（2015年11月刊行）の増補改訂版です。

四六判並製・272頁・2024年4月刊行
978-4-585-37014-7・定価2640円（税込）

日本人は漢文をどう読んだか
直読から訓読へ

湯沢質幸［著］

日本において古代から現在に至るまで延々と読み継がれてきた漢文。その読み方には中国から渡来した中国音で読む〈直読〉、そして、平安時代に生まれ、漢文読解の方法としてその地位を確立した〈訓読〉の二種類が存在する。しかし、古代から現代までの間に〈直読〉は消え、日本語で読む〈訓読〉がもっぱら使われるようになった。なぜ、日本では〈訓読〉優位の状況が生じたのか――。漢文を取り巻く環境を一つ一つ分析することを通して、〈直読〉から〈訓読〉への変化を追い、日本人の漢字漢文受容の歴史を描きだす。

四六判並製・240頁・2024年4月刊行
978-4-585-38006-1・定価3520円（税込）

永平廣録 大全
『祖山本 永平廣録』訓読・訳註・補注参究ならびに解題・関連資料集成

大谷哲夫［著］

道元禅師（1200～1253）の語録として主要な撰述著作は和語による『正法眼蔵』であることは周知の事実である。しかし、それとは別にその説法説示を漢文体で十巻に編纂されたものが、通称『永平広録』と呼ばれ、道元の語録として存在していることは、『正法眼蔵』ほどには知られていない。本書では、原本『祖山本　永平廣録』（全十巻）の正確な「訓読」と「訳」を提供する。また、その語句に対する「語義注釈」、「出典考証」、各項の解説、さらに語義の詳細にわたる「補注参究」、本書に関連する「基本的原典」等の関連書ならびに関連項目の小論・解題等も収載した決定版。

B5判上製（揃函入）・総3200頁超・2024年6月刊行
978-4-585-31017-4・定価71500円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
日本史

増補改訂版
室町時代の将軍家と天皇家

石原比伊呂［著］

室町期の公武関係はいかにして成立、展開し、終焉にいたったのか。尊氏から義政までの足利家歴代将軍たちの朝廷儀礼における行動の分析。将軍家が「公家化」し、自らを北朝天皇家の「輔弼役（執事）」と位置づけ、強力な一体化を築き上げた実態を明らかにする。また、将軍家が天皇家をサポートし、その権威を保障する体制が室町時代の将軍家と天皇家の基本構造であることを提示する。武家の長（足利将軍家家長）と公家の長（北朝天皇家）との関係の展開と基本構造を検討した画期的成果。公武関係をはじめ義満～義教期における足利将軍家の実態の具体像および、足利家と天皇家の一体化の過程を再検討した補論6本を新たに加え、最新の研究成果をふまえて加筆・修正した待望の増補改訂版。

※本書は『室町時代の将軍家と天皇家』（2015年10月刊行）の増補改訂版です。

A5判並製・560頁・2024年5月刊行
978-4-585-32047-0・定価9900円（税込）

近世長崎渡来人文運史
言語接触と文化交流の諸相

若木太一［著］

近世日本において、東アジア各地より渡来した異国人たちは、さまざまな分野において多大な影響を与えた。通事（通訳）となった者、詩を通し日本の文人たちとかかわった者、政治的に活躍した者…。異国人たちはどのように日本で活躍し、どのような思想、文学作品を遺したのか。彼らがたどり着いた「長崎」という場を軸に、様々な資史料を検証し、文化交流の諸相を明らかにする。

A5判上製・704頁・2024年6月刊行
978-4-585-32044-9・定価14300円（税込）

古文書研究
第97号

日本古文書学会[編]

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

◉収録
論文＝室町期東寺奉行の就任経緯と役割拡大（北山航）▼妙心寺派地方寺院に見る戦国期禅僧ネットワークの実態（岩永紘和）▼永禄・元亀年間の能島村上氏と毛利氏備讃瀬戸・児島に注目して（大上幹広）▼特別寄稿＝中世古文書学の再検討（前編）（上島有）▼史料紹介＝本覚院文書にみる戦国期の畠山・大友間交渉（川口成人・窪田頌）▼追悼文＝新川登亀男氏を偲ぶ（川尻秋生）▼林譲氏を悼む（近藤成一）▼随筆＝秀吉の大高檀紙使用開始時期について（村井祐樹）▼書評と紹介ほか

B5判並製・160頁・2024年6月刊行
978-4-585-32407-2・定価4180円（税込）

秀吉の天下統一
奥羽再仕置

江田郁夫[編]

天正18年（1590）、豊臣秀吉は関東の北条氏を滅ぼし、東北の伊達氏を服属させ、全国統一を成し遂げた――。高校教科書に記載される人口に膾炙した定説であるが、本当にこの時点で秀吉の天下統一は完成したのであろうか。関東・東北地方への戦後処理（宇都宮仕置・会津仕置）、そしてその後に勃発した各地の一揆への対応（奥羽再仕置）の波乱に満ちた実情を対象となった各地域それぞれの視点から仔細に描きだすことで、秀吉の天下統一の道程を改めて問い直す画期的成果。

アジア遊学294・A5判並製・308頁・2024年6月刊行
978-4-585-32540-6・定価3520円（税込）

開かれていた鎖国
入り船と出船

片桐一男[著]

鎖国下の日本にオランダ船が運び込んだもの、運び出したものは何か。象やラクダ、更紗・織物・砂糖・ワイン、蘭書・洋紙などの輸入品から浮世絵・版画・地図、刀剣・甲冑、日本の桜などの輸出品まで…。オランダ船の乗船人名簿と積荷目録を紐解き、入港時に運び込んだ海外情報、出航時に運び出した人・物・情報を明らかにする。日蘭交流400年を総括。

A5判上製・352頁・2024年8月刊行
978-4-585-32046-3・定価8800円（税込）

料理の日本史

五味文彦[著]

日々を生きていくために欠かせない「食」。日本の歴史の中で、料理もまた時代により様々な変遷を遂げてきた。どのような料理があり、どのように食されていたのか。天皇、貴族、武士、庶民などの身分、また江戸、京都、地方などの地域によって、料理はどのように違うのか？ 食材にはどのようなものがあり、それらはどのように流通していたのか。料理はどう持ち運ばれ、どのように買われたのか。食べた人の感想はどうだったのか。縄文時代から現代に至るまで、それぞれの時期の社会との関わりに注目し、通史的に料理の変遷が学べる、画期的な一冊。

四六判並製・248頁・2024年9月刊行
978-4-585-32045-6・定価2640円（税込）

ハナシ語りの民俗誌

川島秀一[著]

他愛もないタトエ話、田植えをしながら語られた色話、水引きの時の世間話、巫女が語る言葉、小正月のときに語られる漁村のホラばなし……。「口承文芸」・「民俗学」などという言葉でくくられる前の、身近なところに溢れていた「ハナシ語り」。これら「ハナシ語り」はどのような場で生まれ、語り伝えられてきたのか? それらを記録し、活字化した人たちはどのような意識だったのか? 「ハナシ」に残る儀礼や伝説は、どのように変化し、伝わってきたのか? 「ハナシ語り」が生き生きと行われ、自在に再生産される場に寄り添ってきた著者の体験から、人びとにとっての「ハナシ語り」の場の意味と機能を考える。

四六判並製・256頁・2024年8月刊行
978-4-585-33006-6・定価3520円(税込)

日本中世史論集

森茂暁[著]

鎌倉時代から南北朝期、さらには室町時代にいたる日本中世の政治と文化の諸相を、新史料を含む多様な史料を駆使し考究。中世史を考えるうえでの基盤を提示する。長年、日本中世史研究を領導してきた著者による待望の一冊!

A5判上製・688頁・2024年9月刊行
978-4-585-32053-1・定価13200円(税込)

織田信長文書の世界

永青文庫　珠玉の六〇通

**公益財団法人永青文庫・
熊本大学 永青文庫研究センター[編]**

室町幕府の滅亡、一向一揆との死闘、長篠合戦、本能寺の変など、激動の時代を生きた信長。信長から光秀、そして秀吉へと激しく移りゆく権力に、ときには一日刻みで対応した細川藤孝(幽斎)・忠興・松井康之。そしてついに信長の「天下」を引き継いだ秀吉——
彼らは何を考え、どのように行動し、どう生きたのか。永青文庫が所蔵する60通の信長文書および関連文書から、一瞬一瞬の対応が迫られる波乱の時代の息遣いを読み解く。新たに発見された信長文書を初収録!60通の信長の手紙に加え、藤孝・光秀・秀吉などの文書も含めた全76点をフルカラー掲載。詳細な解説・翻刻・現代語訳なども付した決定版!最新の知見を反映した論説、永青文庫の工芸品紹介なども多数掲載。歴史ファン必携の一冊!

B5判並製・272頁・2024年10月刊行
978-4-585-32054-8・定価3080円(税込)

増補改訂版

明恵上人夢記 訳注

奥田勲・平野多恵・前川健一[編]

鎌倉仏教に異彩を放つ僧・明恵の精神世界を探る基礎資料。中世の歴史・信仰・美術・言語、ひいては広く日本文化を解明するための画期的成果。2015年に刊行後、早々に品切となった同書を増補改訂。新出の夢記4点を含む増補改訂を施した決定版!
高山寺以外の各所に分散所蔵されており、全体を見渡しての研究が困難であった明恵上人の山外本「夢記」をはじめて網羅的に収集。それらの影印・解題・目録及び夢記一点ごとの翻刻・訓読・現代語訳・考察を収載した、明恵上人夢記研究における画期的な基礎文献である。・夢・思想・宗教・歴史などの分析・検討に広く有用な資料を提供し、文学・思想・宗教・歴史・心理学・精神医学・日本語学・古筆学・美術等、さまざまな研究分野に裨益する必携の一書。

A5判上製・580頁・2024年11月刊行
978-4-585-31019-8・定価8800円(税込)

鎌倉幕府の文学論は成立可能か!?

真名本『曽我物語』テクスト論

神田龍身［著］

武士団の世界観、東国ならではの恋物語、縁起や唱導の言葉の引用、頼朝と曽我兄弟の弟・五郎との熾烈な言葉の応酬などの言語的実験…中世東国のなんたるかを如実に体現した範例的・普遍的テクストであると言える真名本『曽我物語』。そしてなによりも「歴史テクスト」としての自らを押し出したのが真名本という物語ではないのか。一方、真名本と同じ事件を取材しながらも、まったくの反対方向を志向している『吾妻鏡』の歴史テクストを歴史たらしめる言葉の構造とは何なのか。真名本『曽我物語』と『吾妻鏡』という二つの作品の関係論、また『金槐和歌集』や『新古今和歌集』、『神道集』、『太平記』などさまざまなテクストを比較することにより、鎌倉時代における文学の言語空間について考察する。

四六判上製・368頁・2024年10月刊行
978-4-585-39045-9・定価4180円（税込）

都市鎌倉の展開と鶴岡八幡宮の社人集団

佐藤博信［著］

神仏習合時代の鎌倉の鶴岡八幡宮は、別当（社家）・供僧（院家）・小別当・神主・社人によって構成される寺院であった。なかでも、社僧・伶人・巫女・神官・大工棟梁などそれぞれの専門職能（家職）をもって奉仕した社人たちは、八幡宮の聖と俗の境界領域をまたぐ場で公私に及び活動し、長く一つの独自の世界を作り出して来た。彼らの豊かな歴史と伝統は、鎌倉期だけでなく江戸期に至るまで存在した。各地・各分野に残された断片的史料から、社人たちの公私にわたる歴史的役割を具体的に明らかにし、彼らを鶴岡八幡宮のみならず都市鎌倉を下から支えた存在として改めて注目することで新たな鎌倉史像を打ち立てる。

A5判上製・274頁・2024年10月刊行
978-4-585-32050-0・定価8800円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
日本史

日本人にとって教養とはなにか

〈和〉〈漢〉〈洋〉の文化史

鈴木健一［著］

古来、人びとはより良い生き方を求め、より広い世界へとつながっていくために、さまざまな文化や知識と触れ合い、まじりあう中で社会とその規範を作り上げてきた。奈良時代以前から現代にいたるまで、日本人が「人としてどう生きるか」を模索してきた歴史を、日本由来の文化である〈和〉、中国由来の文化である〈漢〉、そして欧米由来の文化である〈洋〉の交錯の中から描き出す画期的な一冊。

四六判並製・392頁・2024年10月刊行
978-4-585-39044-2・定価3850円（税込）

荘園制再編と中世日本

小川弘和［著］

院政期から室町期にかけての地域秩序の変容は、荘園制にどのような変化をもたらしたのか。人びとは、荘園制の成立・再編にいかに向き合ったのか。領主による徴税システム・統治体制の連続・断絶両面と地域偏差に目配りしつつ、播磨国矢野荘の荘官・名主たちの動向、国別田数帳簿の運用・性格の変化、地下文書作成・運用・保管、神仏体系の受容など、多角的な視点から再編前後の荘園制の実態に迫る。中世日本の社会構造を立体的に描き出すとともに、荘園史研究に新しい方向性を示した意欲作。

A5判上製・272頁・2024年10月刊行
978-4-585-32057-9・定価8800円（税込）

天文文化学の視点

星を軸に文化を語る

松浦清・真貝寿明［編］

天文現象は古代より人々の生活や文化活動に密接に関わり、文学や美術に広く取り入れられるとともに、現代科学の発端ともなった。古典籍・美術品・工芸品・遺跡・数式等の中には天文に関わる多様な表現がみられ、それらはさまざまな角度から考察することができる。銅鏡の文様に見られる古代中国の宇宙観とは？浦島太郎のタイムトラベルの理論物理学的な可能性とは？一条兼良はどのような星空を見ていたのか？沖縄に伝わる神歌に歌われた星に、人々は何を託していたのか？絵画・文学作品、信仰・思想、民俗、実際の天体現象など、様々な視点から、文化史と科学論を統合して自然観を考察する。細分化され過ぎた現在の学問を新たに捉え直し、総体としての知を確立する挑戦！

アジア遊学296・A5判並製・320頁・2024年10月刊行
978-4-585-32542-0・定価3850円（税込）

廃墟の文化史

木下華子・山本聡美・渡邉裕美子［編］

近代産業遺産、廃業した遊園地やホテル、廃村や廃校など、現代において「廃墟」はたびたびブームとなり、人々の心を強く惹きつける。そしてひとたび、古典の世界に目を向ければ、古都や古代寺院の遺構、絵画・記録・物語や伝承などに遺された荒廃した町並みや建造物など、さまざまな廃墟表象が見いだせる。「廃墟」はなぜ描かれ、語り継がれたのか。そこにはどのようなイメージ、意図が込められていたのか。人々は「廃墟」に何を託したのか――。これまであまり考察されることのなかった、日本の廃墟表象を捉え直し、文学・美術・芸能など様々な視点から、古代以来連綿と人々が廃墟と共存した様相や、廃墟が文化の再生・胚胎を可能とする機能的な場であることを明らかにする。日本の歴史・文化史に立脚した廃墟をめぐる新たな視座を提供する挑戦。

アジア遊学297・A5判並製・288頁・2024年11月刊行
978-4-585-32543-7・定価3300円（税込）

看聞日記とその時代

好奇心旺盛な皇族・伏見宮貞成が語る中世社会

薗部寿樹［著］

室町時代史研究における第一級史料『看聞日記』。その日記には貧乏な皇族・伏見宮貞成が京都近郊の村落・伏見に移り住んで見聞きした中世社会のありようが事細かに記録されている。将軍足利義教が暗殺された嘉吉の乱の内幕、僧侶の犯罪、猿楽の鑑賞や酒宴、怪異や怨霊と陰陽師の活躍など――。33年分の日記のなかから、政治・思想・社会・文化・習俗に関する興味深いエピソードを選出。読みやすい現代語訳とわかりやすい解説で楽しむ一冊。

四六判並製・344頁・2024年10月刊行
978-4-585-32059-3・定価4620円（税込）

無住道暁の拓く鎌倉時代

中世兼学僧の思想と空間

土屋有里子［編］

『沙石集』、『雑談集』などの説話集編者として知られる無住道暁（むじゅうどうぎょう、1226～1312。鎌倉時代後期の遁世僧）。近年、無住の修学面に関する新資料が公になり、その研究も大きく飛躍しているが、彼自身の人生を諸分野から概観する書籍はない。彼はいつどこで誰に出会い、どのような教えを受け、何を選択したのか。鎌倉時代を代表する説話集は、無住のいかなる人生を投影して作られたのか。無住が生きた土地・場、各地での僧侶間ネットワークに着目し、宗教者としての内実を読み解くと同時に、無住をとりまく文芸活動を考察。鎌倉幕府や北条氏にも高い関心を寄せた無住の修学・文学を、彼の人生の流れに沿ってとらえ直す。

アジア遊学298・A5判並製・216頁・2024年11月刊行
978-4-585-32544-4・定価3080円（税込）

近世日本邪正論

江戸時代の秩序維持と キリシタン・隠れ／隠し念仏

大橋幸泰［著］

近世日本で絶対的な「邪」とされた「切支丹」という言葉とそこから派生したイメージは、近世人の秩序意識をいかに支え、当該期の国家や社会にどのような矛盾をもたらしたのか——。禁教下の江戸時代において、キリシタンたちは、潜伏活動のほか、寺や神社の活動に参加するなど複数の宗教属性をもち、さらに村民という世俗的属性をもって暮らしていた。潜伏キリシタンや隠れ念仏・隠し念仏など、近世日本の潜伏宗教をめぐる動向に焦点を当て、村社会でキリシタンと非キリシタンという諸属性が共存していた実態を示すとともに、治者がキリシタン禁制による社会秩序を維持するための諸政策をどのように行い、被治者がそれらをどのように受け止めたのか明らかにする。さらに、その近世秩序がしだいに解消され、異質な諸属性の共存状態も解体していく過程を跡付ける。

A5判上製・368頁・2024年11月刊行
978-4-585-32058-6・定価11000円（税込）

近代日本の中国学

その光と影

朱琳・渡辺健哉［編著］

古来、日本にとって大いなる「他者」であり続けている中国。近代化を目指した日本において、その中国との差異化は文明論の大きな課題であった。伝統的な「漢学」を打破しつつも、西洋の「シノロジー」をそのまま受容せず、独自の「支那学」を作り上げた近代日本の知識人たち。その学問は戦争や時局の流れに翻弄され、時には「光」となり人々の心を照らし、また、「影」となり批判や反省の対象となることもあった。知の編成・連鎖・再生産といった視点から、近代日本の中国学の変遷過程をたどり、東アジアの近代知のあり方および文化交流の実態の一面に迫る画期的論集。

アジア遊学299・A5判並製・384頁・2024年12月刊行
978-4-585-32545-1・定価3850円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
日本史

古文書研究

第98号

日本古文書学会［編］

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

◉収録
論文＝中世朝廷の官司下文（殷捷）▼観応の擾乱前後における山門派僧の去就（高鳥廉）▼江戸幕府大老奉書の発給（野田浩子）▼近世中後期における代官・預所大名の序列と支配替（尾崎真理）▼特別寄稿＝中世古文書学の再検討（上島有）▼追悼文＝元木泰雄理事追悼文（漆原徹）▼古文書めぐり＝尚古集成館の所蔵文書について（福元啓介）▼地域と古文書＝荒川区立荒川ふるさと文化館の古文書講座と二つの古文書サークル（亀川泰照）▼随筆＝天正二十年五月十八日山中長俊書状（藤井譲治）▼研究余滴ほか

A5判並製・160頁・2024年12月刊行
978-4-585-32408-9・定価4180円（税込）

道教文化と日本

陰陽道・神道・修験道

日本道教学会［編］

東王公・西王母、司命・司籍、泰山、雷神、太歳、竈神（庚申信仰）、墓葬壁画にみえる四神と仙人、神器としての鏡、剣、玉、民間に流伝した風習や伝説、術数、風水、医薬学……古来、日本文化の中には、様々な道教的な要素が見られる。道教は、いつどのように日本に伝来したのか。道教の東アジア的広がりは、日本にどのような影響をもたらしたのか。「道教的な要素」は、果たして本当に道教に由来していると言えるのか。由来や存在形態などに未だ不明な部分が多い、日本における「道教文化」。陰陽道、神道、修験道、そして仏教など、多角的な視点から文化要素の問題を再検討し、日本における需要のありかたや、日本文化への影響を解き明かす。

A5判並製・約300頁予定・2025年1月刊行予定
978-4-585-31020-4・予価4180円（税込）

武蔵武士を巡る
東京・神奈川の史跡と伝説

北条氏研究会［編］

武蔵国内を本拠として、平安時代末期から南北朝時代にかけて活躍した「武蔵武士」。彼らの出自は多様であり、その中には、坂東八平氏の一部や武蔵七党、古代の郡司の系統を引く氏族、また、鎌倉幕府成立の時に活躍した畠山重忠や熊谷直実なども含まれる。源平合戦で活躍し、鎌倉幕府の発展にも寄与した武蔵武士たちが、武蔵国南部に残した史跡やそこに伝わる伝説を紹介。地形、河川、道、行政区分、戦場、板碑・石造物などを多数の写真・図とともに詳しく解説する。文字史料だけではわからない、新たな時代の開拓者としての姿や、鎌倉に通じる道の景観など、武蔵武士の足跡をたどるための、最良のガイドブック！地域ごとの史跡一覧・仏像一覧、実際に現地を巡るための散策コースなども付す。

大好評『武蔵武士を歩く――重忠・直実のふるさと　埼玉の史跡』（2015年）の待望の姉妹編！！

A5判並製・480頁・2025年1月刊行
978-4-585-32055-5・定価4180円（税込）

新装版武蔵武士を歩く
重忠・直実のふるさと　埼玉の史跡

北条氏研究会［編］

鎌倉幕府成立の要として、中世史の中枢に足跡を残した「武蔵武士」。かれらが武蔵の各地に残した様々な史跡を膨大な写真・図版資料とともに詳細に解説。史跡や地名から歴史を読み取るためのコツや、史跡めぐりのルート作成方法を指南。武蔵武士の息づかいを体感するためのガイドブック。

※本書は『武蔵武士を歩く』（2015年1月刊行）の新装版です。

A5判並製・400頁・2025年1月刊行
978-4-585-32062-3・定価2970円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024
仏教
関連書籍

器と信仰

東アジアの舎利荘厳をめぐる 美術史・考古学からのアプローチ

加島勝［編］

釈迦の遺骨として、アジア各地で篤い信仰を集める「舎利」。その容れ物である舎利容器は、特定の用途を持つ器形や、別の文脈で意味を成した図像が複合的に組み合わされ、舎利を荘厳する器として仕立て上げられた。それゆえ、「器のかたち」――どこで、どのような器の形状・素材・図様が採用されてきたのかという問題は、「舎利の意味」――舎利が各地域の社会においてどのような存在として受容されたのかということと相関関係を有している。中国・日本・韓国・ベトナムの実地調査を礎とした、舎利及びその荘厳に関する最新の知見を提示。また、資料編では、現地調査にて得られた作例の基礎データ、また、舎利荘厳における大きな画期である仁寿舎利塔の網羅的調査記録を提示、貴重な画像資料も収載した。美術史学界・考古学界のみならず、日本及び東洋の文化史に関わる領域に広く寄与する画期的成果。

B5判上製・460頁・2024年3月刊行
978-4-585-32041-8・定価16500円（税込）

01

「見える」ものや「見えない」ものをあらわす

東アジアの思想・文物・藝術

外村中・稲本泰生［編］

「見える」／「見えない」を論じること、それらを描き出すこと――。宗教や思想、芸術などの人間の営みは、このことが大変重要かつ普遍的なテーマであることを示している。東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、「見えるもの／見えないもの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求。宗教・思想をはじめ、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ様々な論点を、最先端の研究者24名の視角により提示する画期的論集。

B5判上製・746頁・2024年3月刊行
978-4-585-37012-3・定価15400円（税込）

02

勉誠社
刊行案内
2024
仏教
関連書籍

泰山諸神の信仰の展開

東岳大帝から碧霞元君へ

二ノ宮聡［著］

東岳大帝・碧霞元君などの神々の起源・由来・伝承を整理し、それらの民俗信仰の様相と変遷を考察。また先行調査と実地調査から、泰山諸神の信仰対象の移り変わりと民衆の認識を検討し、明代以降に隆盛する碧霞元君信仰について泰山・北京・大石橋市における廟会の事例を踏まえ、往時と現在の信仰の比較、廟会復興の過程を紹介。参考資料として、現代における廟会の図版を多数掲載。泰山諸神の信仰状況を歴史的に検討し、広い視点から泰山信仰ひいては中国の民間信仰の一端を明らかにする画期的成果！

A5判上製・304頁・2024年1月刊行
978-4-585-31018-1・定価8800円（税込）

03

増補改訂版

図像学入門

疑問符で読む日本美術

山本陽子［著］

麗子像はどうしてあんなこわい顔？ 足なし幽霊は応挙から？ 釈迦の托胎は「受胎告知」と似てる？ 絵画や仏像などのさまざまな疑問・謎を図像解釈学（イコノロジー）から探り、日本美術の新しい楽しみ方を提案する。新たに8つのトピックを追加し、増補改訂版として刊行。

※本書は『図像学入門――疑問符で読む日本美術』（2015年11月刊行）の増補改訂版です。

四六判並製・272頁・2024年4月刊行
978-4-585-37014-7・定価2640円（税込）

04

永平廣録 大全

『祖山本 永平廣録』訓読・訳註・補注参究
ならびに解題・関連資料集成

大谷哲夫[著]

道元禅師（1200～1253）の語録として主要な撰述著作は和語による『正法眼蔵』であることは周知の事実である。
しかし、それとは別にその説法説示を漢文体で十巻に編纂されたものが、通称『永平広録』と呼ばれ、道元の語録として存在していることは、『正法眼蔵』ほどには知られていない。
本書では、原本『祖山本　永平廣録』（全十巻）の正確な「訓読」と「訳」を提供する。また、その語句に対する「語義注釈」、「出典考証」、各項の解説、さらに語義の詳細にわたる「補注参究」、本書に関連する「基本的原典」等の関連書ならびに関連項目の小論・解題等も収載した決定版。

B5判上製（揃函入）・総3200頁超・2024年6月刊行
978-4-585-31017-4・定価71500円（税込）

増補改訂版

明恵上人夢記 訳注

奥田勲・平野多恵・前川健一[編]

鎌倉仏教に異彩を放つ僧・明恵の精神世界を探る基礎資料。中世の歴史・信仰・美術・言語、ひいては広く日本文化を解明するための画期的成果。2015年に刊行後、早々に品切となった同書を増補改訂。新出の夢記4点を含む増補改訂を施した決定版！
高山寺以外の各所に分散所蔵されており、全体を見渡しての研究が困難であった明恵上人の山外本「夢記」をはじめて網羅的に収集。それらの影印・解題・目録及び夢記一点ごとの翻刻・訓読・現代語訳・考察を収載した、明恵上人夢記研究における画期的な基礎文献である。・夢・思想・宗教・歴史などの分析・検討に広く有用な資料を提供し、文学・思想・宗教・歴史・心理学・精神医学・日本語学・古筆学・美術等、さまざまな研究分野に裨益する必携の一書。

A5判上製・580頁・2024年11月刊行
978-4-585-31019-8・定価8800円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024
仏教
関連書籍

無住道暁の拓く鎌倉時代

中世兼学僧の思想と空間

土屋有里子[編]

『沙石集』、『雑談集』などの説話集編者として知られる無住道暁（むじゅうどうぎょう、1226～1312。鎌倉時代後期の遁世僧）。近年、無住の修学面に関する新資料が公になり、その研究も大きく飛躍しているが、彼自身の人生を諸分野から概観する書籍はない。彼はいつどこで誰に出会い、どのような教えを受け、何を選択したのか。鎌倉時代を代表する説話集は、無住のいかなる人生を投影して作られたのか。無住が生きた土地・場、各地での僧侶間ネットワークに着目し、宗教者としての内実を読み解くと同時に、無住をとりまく文芸活動を考察。鎌倉幕府や北条氏にも高い関心を寄せた無住の修学・文学を、彼の人生の流れに沿ってとらえ直す。

アジア遊学298・A5判並製・216頁・2024年11月刊行
978-4-585-32544-4・定価3080円（税込）

近世日本邪正論

江戸時代の秩序維持と
キリシタン・隠れ／隠し念仏

大橋幸泰[著]

近世日本で絶対的な「邪」とされた「切支丹」という言葉とそこから派生したイメージは、近世人の秩序意識をいかに支え、当該期の国家や社会にどのような矛盾をもたらしたのか――。禁教下の江戸時代において、キリシタンたちは、潜伏活動のほか、寺や神社の活動に参加するなど複数の宗教属性をもち、さらに村民という世俗的属性をもって暮らしていた。潜伏キリシタンや隠れ念仏・隠し念仏など、近世日本の潜伏宗教をめぐる動向に焦点を当て、村社会でキリシタンと非キリシタンという諸属性が共存していた実態を示すとともに、治者がキリシタン禁制による社会秩序を維持するための諸政策をどのように行い、被治者がそれらをどのように受け止めたのか明らかにする。さらに、その近世秩序がしだいに解消され、異質な諸属性の共存状態も解体していく過程を跡付ける。

A5判上製・368頁・2024年11月刊行
978-4-585-32058-6・定価11000円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024
東洋文化
東洋史

泰山諸神の信仰の展開

東岳大帝から碧霞元君へ

二ノ宮聡［著］

東岳大帝・碧霞元君などの神々の起源・由来・伝承を整理し、それらの民俗信仰の様相と変遷を考察。また先行調査と実地調査から、泰山諸神の信仰対象の移り変わりと民衆の認識を検討し、明代以降に隆盛する碧霞元君信仰について泰山・北京・大石橋市における廟会の事例を踏まえ、往時と現在の信仰の比較、廟会復興の過程を紹介。参考資料として、現代における廟会の図版を多数掲載。泰山諸神の信仰状況を歴史的に検討し、広い視点から泰山信仰ひいては中国の民間信仰の一端を明らかにする画期的成果！

A5判上製・304頁・2024年1月刊行
978-4-585-31018-1・定価8800円（税込）

朝鮮時代ソウル都市史

高東煥［著］
野崎充彦・金子祐樹［訳］

十五世紀より今日まで韓国の歴史の中心に位置する都市、ソウル。移ろいゆく時代のなかで人びとの生活や文化、都市そのもののあり方は如何に変遷していったのか――。遷都の背景にあった風水と儒教の役割と都市設計、私商人らが伸長していくことで生じた市場の増大や、流浪民による人口増加などの諸現象、また、徭役の金納化や請負業者の発展がもたらす行政施策の変化、都市民の出現による朝鮮後期の遊興文化の爛熟など、ソウルという都市をめぐる諸相を考察。さらに様々な古地図にあらわれた都市空間に対する認識の時代的変容をも検討し、ソウルという時空間の複雑な展開を明らかにし、朝鮮時代史研究の新しいパラダイムと研究の方法論を提示する。膨大な資料の分析と多角的な視点により、朝鮮後期の社会経済史研究を領導してきた著者による画期的研究成果を初邦訳。

A5判上製・456頁・2024年2月刊行
978-4-585-32039-5・定価9900円（税込）

01 02

勉誠社
新刊案内
2024
東洋文化
東洋史

03 04

「見える」ものや「見えない」ものをあらわす

東アジアの思想・文物・藝術

外村中・稲本泰生［編］

「見える」／「見えない」を論じること、それらを描き出すこと――。宗教や思想、芸術などの人間の営みは、このことが大変重要かつ普遍的なテーマであることを示している。東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、「見えるもの／見えないもの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求。宗教・思想をはじめ、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ様々な論点を、最先端の研究者24名の視角により提示する画期的論集。

B5判上製・746頁・2024年3月刊行
978-4-585-37012-3・定価15400円（税込）

器と信仰

東アジアの舎利荘厳をめぐる
美術史・考古学からのアプローチ

加島勝［編］

釈迦の遺骨として、アジア各地で篤い信仰を集める「舎利」。その容れ物である舎利容器は、特定の用途を持つ器形や、別の文脈で意味を成した図像が複合的に組み合わされ、舎利を荘厳する器として仕立て上げられた。それゆえ、「器のかたち」――どこで、どのような器の形状・素材・図様が採用されてきたのかという問題は、「舎利の意味」――舎利が各地域の社会においてどのような存在として受容されたのかということと相関関係を有している。中国・日本・韓国・ベトナムの実地調査を礎とした、舎利及びその荘厳に関する最新の知見を提示。また、資料編では、現地調査にて得られた作例の基礎データ、また、舎利荘厳における大きな画期である仁寿舎利塔の網羅的調査記録を提示、貴重な画像資料も収載した。美術史学界・考古学界のみならず、日本及び東洋の文化史に関わる領域に広く寄与する画期的成果。

B5判上製・460頁・2024年3月刊行
978-4-585-32041-8・定価16500円（税込）

湖北省留日学生と明治日本

王鼎[著]

明治期に日本へ派遣された中国人留学生たちは、どのような目的で来日し、どのような行動をとっていたのか。彼らの活動や日本で学んだ知識・思想は、日中両国間の政治・外交・文化交流にどのような影響を与えたのか。これまで、湖北省から大量の学生を日本へ送り出した張之洞の功績については注目されてきたが、湖北省留日学生の人生とその軌跡については、いまだ歴史の中に埋もれたままである。本書では、彼らが日本留学に至った経緯から留学中の生活、同郷会の雑誌・教科書の出版や翻訳活動、留学制度と留学生受け入れの実態、さらには軍事系留学生と辛亥革命の関係までを、徹底的に究明。豊富な史料とフィールドワークに基づき、多角的視座から分析と考察を加え、従来の日中留学生史研究に新たな光を当てた待望の新機軸。武漢大学・馮天瑜教授推薦!

A5判上製・376頁・2024年3月刊行
978-4-585-32043-2・定価7700円(税込)

水門
第31号

水門の会[編]

歴史学・文学・言語学・民俗学など諸学の粋を集め、ジャンルを越えた新たな学問世界への扉を開く。小特集は、「宮澤賢治・日本文学と日本語教育が出逢うとき——翻訳論・出典論研究会」・「平安楽人、渡来の楽と出会う」の2本立てとなる。

◉収録
小特集＝宮澤賢治・日本文学と日本語教育が出逢うとき▼小特集＝平安楽人、渡来の楽と出会う▼自由テーマ▼『南総里見八犬伝』研究会▼『箋注倭名類聚抄』研究会▼連載▼書評▼彙報

A5判並製・336頁・2024年3月刊行
978-4-585-32462-1・定価3850円(税込)

勉誠社
新刊案内
2024
東洋文化
東洋史

杜甫研究年報
第七号

日本杜甫学会[編]

「詩聖」杜甫。その詩は、それ以前の詩の総括であるとともに、以後の中国詩の出発点でもある。
日本においては、五山の僧の崇敬、芭蕉の傾倒があり、明治以後も、中江兆民・島崎藤村・正岡子規を始め、知識人・国民の間で、その親愛の念は一貫して揺るがないものだった。漢文教育においても、杜甫の詩は教材の中で重要な位置を占めてきた。世界における杜甫への関心を見つめつつ、変転する時の中で無窮の未来に向かって杜甫研究を発展させ続ける一冊。

A5判並製・96頁・2024年4月刊行
978-4-585-39447-1・定価2200円(税込)

中国古典戯曲演劇論

岡晴夫[著]

構成やしぐさ、舞台の演出効果に焦点を当てた中国元曲論、通俗の面白さは何かを追究した劇作家・李漁論、豊富な歴史や知識と観劇体験に裏打ちされた京劇論の三部構成による珠玉の論文集。独特の軽妙洒脱な文体で綴り、文学・文芸の本質を考察し続けた中国文学研究者の軌跡。

A5判上製・504頁・2024年4月刊行
978-4-585-37015-4・定価16500円(税込)

日本人は漢文をどう読んだか
直読から訓読へ

湯沢質幸[著]

日本において古代から現在に至るまで延々と読み継がれてきた漢文。その読み方には中国から渡来した中国音で読む〈直読〉、そして、平安時代に生まれ、漢文読解の方法としてその地位を確立した〈訓読〉の二種類が存在する。しかし、古代から現代までの間に〈直読〉は消え、日本語で読む〈訓読〉がもっぱら使われるようになった。なぜ、日本では〈訓読〉優位の状況が生じたのか——。漢文を取り巻く環境を一つ一つ分析することを通して、〈直読〉から〈訓読〉への変化を追い、日本人の漢字漢文受容の歴史を描きだす。

四六判並製・240頁・2024年4月刊行
978-4-585-38006-1・定価3520円(税込)

近世長崎渡来人文運史
言語接触と文化交流の諸相

若木太一[著]

近世日本において、東アジア各地より渡来した異国人たちは、さまざまな分野において多大な影響を与えた。通事(通訳)となった者、詩を通し日本の文人たちとかかわった者、政治的に活躍した者…。異国人たちはどのように日本で活躍し、どのような思想、文学作品を遺したのか。彼らがたどり着いた「長崎」という場を軸に、様々な資史料を検証し、文化交流の諸相を明らかにする。

A5判上製・704頁・2024年6月刊行
978-4-585-32044-9・定価14300円(税込)

永平廣録 大全
『祖山本 永平廣録』訓読・訳註・補注参究ならびに解題・関連資料集成

大谷哲夫[著]

道元禅師(1200～1253)の語録として主要な撰述著作は和語による『正法眼蔵』であることは周知の事実である。しかし、それとは別にその説法説示を漢文体で十巻に編纂されたものが、通称『永平広録』と呼ばれ、道元の語録として存在していることは、『正法眼蔵』ほどには知られていない。本書では、原本『祖山本　永平廣録』(全十巻)の正確な「訓読」と「訳」を提供する。また、その語句に対する「語義注釈」、「出典考証」、各項の解説、さらに語義の詳細にわたる「補注参究」、本書に関連する「基本的原典」等の関連書ならびに関連項目の小論・解題等も収載した決定版。

B5判上製(揃函入)・総3200頁超・2024年6月刊行
978-4-585-31017-4・定価71500円(税込)

開かれていた鎖国
入り船と出船

片桐一男[著]

鎖国下の日本にオランダ船が運び込んだもの、運び出したものは何か。象やラクダ、更紗・織物・砂糖・ワイン、蘭書・洋紙などの輸入品から浮世絵・版画・地図、刀剣・甲冑、日本の桜などの輸出品まで…。オランダ船の乗船人名簿と積荷目録を紐解き、入港時に運び込んだ海外情報、出航時に運び出した人・物・情報を明らかにする。日蘭交流400年を総括。

A5判上製・352頁・2024年8月刊行
978-4-585-32046-3・定価8800円(税込)

平安朝詩文論集

後藤昭雄［著］

平安朝において漢詩文は、学問の中心として大きな位置を占めていた。国家儀礼はもとより、官吏登用試験、公的な宴の場や歴史書編纂、さらには宗教の場などにおいても、漢学の素養の有無がそこに関わる人物の評価に大きく関わるものであった。平安朝の文人たちが残した漢文資料の一文字一文字と真摯に向き合い、内容を読解。彼らの学問環境、史的位置づけと重ね合わせることで、平安朝の漢詩文をめぐる歴史的状況を明らかにする。長年に亙って平安朝の漢文学研究に携わってきた著者の最新論文集。

A5判上製・528頁・2024年9月刊行
978-4-585-39043-5・定価13200円（税込）

増補改訂版

東インド会社とアジアの海賊

東洋文庫・斯波義信・平野健一郎・羽田正［監修］
牧野元紀［編］

17世紀初頭にヨーロッパで誕生した東インド会社とその海上覇権の確立にあたって大きな障壁となった現地の海賊たち。両者は善と悪という単純な図式では表せない関係にあった。東インド会社もまた海賊であった――。東インド会社と海賊の攻防と、活動の実態を明らかにする。インド洋西海域の海賊活動の実態を示す論考1本を追加し、増補改訂版として装い新たに刊行。東洋文庫創立100周年記念！

※本書は『東インド会社とアジアの海賊』（2015年4月刊）の増補改訂版になります。

四六判並製・380頁・2024年9月刊行
978-4-585-32056-2・定価3520円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
東洋文化
東洋史

蘇州版画

東アジア印刷芸術の革新と東西交流

青木隆幸・板倉聖哲・小林宏光［編］

芸術文化の古い歴史を持ち、経済的繁栄をきわめていた17、18世紀の中国・蘇州市に生まれた「蘇州版画」。吉祥的な画題や教訓、歴史故事、名所旧跡、通俗文学や詩の絵解きなどさまざまな題材をとり上げ、当時の都市のにぎわい、市民の暮らしを大きな画面に描き伝える貴重な視覚資料でもある。技法も多彩で、濃淡の墨摺、複数色の色刷りと手彩色、また、舶載された西洋銅版画などの陰影法や透視図法も積極的に応用する。これらは江戸時代の長崎に大量にもたらされ、ヨーロッパにも輸出されて宮殿の室内を飾り、美術工芸品への応用が注目されてきた。中国版画史を突出して彩るその歴史と世界的広がりを、国内外の第一線の論者が多数の図版を交えて明らかにする貴重な一書。

2023年、海の見える杜美術館にて開催され、美術ファン・研究者に大きな衝撃を与えた『蘇州版画の光芒―国際都市に華ひらいた民衆芸術』展。そのエッセンスと関連シンポジウムの成果を収録。

アジア遊学295・A5判並製・320頁・2024年10月刊行
978-4-585-32541-3・定価3520円（税込）

日本古典文学と中国の古伝承

物語形成の比較文学的考察

三木雅博［著］

『古事記』『竹取物語』『うつほ物語』『伊勢物語』などの史書や物語、さらには説話集や唱導、説経など日本古典文学に登場する様々な物語には、孝子譚（儒教の重要な徳目である親孝行に関する説話）や韓朋譚（横暴な皇帝に苦しめられる夫婦の悲恋の物語）などの中国の古伝承の影響を認めることができる。これら中国の古伝承は、早く奈良時代には日本に伝来し、日本人にも旧知の物語となっていた。日本古典文学において新たな物語が創造される際に、これら旧知の物語はいかなる影響を与えたのか――。東アジア諸地域の資料を博捜し、比較文学的視点より日本古典文学と中国の古伝承の影響関係を追及、物語形成の局面を描き出す。

A5判上製・344頁・2024年10月刊行
978-4-585-39042-8・定価11000円（税込）

日本人にとって教養とはなにか
〈和〉〈漢〉〈洋〉の文化史

鈴木健一［著］

古来、人びとはより良い生き方を求め、より広い世界へとつながっていくために、さまざまな文化や知識と触れ合い、まじりあう中で社会とその規範を作り上げてきた。奈良時代以前から現代にいたるまで、日本人が「人としてどう生きるか」を模索してきた歴史を、日本由来の文化である〈和〉、中国由来の文化である〈漢〉、そして欧米由来の文化である〈洋〉の交錯の中から描き出す画期的な一冊。

四六判並製・392頁・2024年10月刊行
978-4-585-39044-2・定価3850円（税込）

帝鑑図と帝鑑図説
日本における勧戒画の受容

小助川元太・薬師寺君子・野田麻美・水野裕史［編］

古来、中国そして東アジア各国においては為政者がいかにあるべきかを説くために、他者や過去の出来事を鑑として戒めとすべき手本を示した「勧戒画（鑑戒画）」が利用されてきた。なかでも中国帝王にまつわる故事を取り上げたものは「帝鑑図」と称され、屏風や障壁画など室礼や儀礼空間の荘厳として、また、挿絵となり物語と共に『帝鑑図説』として版本化され、東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。本書では、日本における帝鑑図・帝鑑図説の諸作品を美術史・文学研究の第一線の視点より、多角的に考察。通説を再検討し、「帝鑑図」とは何か、という基本的な定義を問い直す画期的成果。豊富な図版資料また国内作品の網羅的リストも具備した、東アジア文化史研究における必携の一冊！

A4判並製・432頁・2024年11月刊行
978-4-585-37017-8・定価16500円（税込）

近代日本の中国学
その光と影

朱琳・渡辺健哉［編著］

古来、日本にとって大いなる「他者」であり続けている中国。近代化を目指した日本において、その中国との差異化は文明論の大きな課題であった。伝統的な「漢学」を打破しつつも、西洋の「シノロジー」をそのまま受容せず、独自の「支那学」を作り上げた近代日本の知識人たち。その学問は戦争や時局の流れに翻弄され、時には「光」となり人々の心を照らし、また、「影」となり批判や反省の対象となることもあった。知の編成・連鎖・再生産といった視点から、近代日本の中国学の変遷過程をたどり、東アジアの近代知のあり方および文化交流の実態の一面に迫る画期的論集。

アジア遊学299・A5判並製・384頁・2024年12月刊行
978-4-585-32545-1・定価3850円（税込）

新装版
数と易の中国思想史
術数学とは何か

川原秀城［著］

天文学や数学などの数理科学的分野を対象とする暦算、そして、易学の一側面として、福を冀い禍を逃れることを目的とし、「数」のもつ神秘性に着目する占術からなり、広く東アジア全域に巨大な影響を与えてきた。術数学に見え隠れする数と易とのジレンマを解明し、「数」により世界を理解する術数学の諸相を総体的に捉えることで、中国思想史の基底をなす学問の体系を明らかにする。

※本書は『数と易の中国思想史』（2018年5月刊行）の新装版です。

A5判並製・256頁・2024年12月刊行
978-4-585-81045-2・定価7700円（税込）

道教文化と日本

陰陽道・神道・修験道

日本道教学会［編］

東王公・西王母、司命・司籍、泰山、雷神、太歳、竈神（庚申信仰）、墓葬壁画にみえる四神と仙人、神器としての鏡、剣、玉、民間に流伝した風習や伝説、術数、風水、医薬学……古来、日本文化の中には、様々な道教的な要素が見られる。道教は、いつどのように日本に伝来したのか。道教の東アジア的広がりは、日本にどのような影響をもたらしたのか。「道教的な要素」は、果たして本当に道教に由来していると言えるのか。由来や存在形態などに未だ不明な部分が多い、日本における「道教文化」。陰陽道、神道、修験道、そして仏教など、多角的な視点から文化要素の問題を再検討し、日本における需要のありかたや、日本文化への影響を解き明かす。

A5判並製・約300頁予定・2025年1月刊行予定
978-4-585-31020-4・予価4180円（税込）

勉誠社
刊行案内
2023〜
2024
美術・芸術

二一世紀の川劇
文化資源化の視点から

江玉[著]

お面が一瞬で入れ替わる「変面」で知られる、中国四川省を代表する伝統劇・川劇。2006年に中国の非物質文化遺産（無形文化財）に登録された川劇は、政治や社会とどのようにかかわり展開・変容してきたのか。現代における役割・意義とは何か。作品のテーマ性や芸術性の比較検討、商業公演のもたらす経済効果、教授・学習の実体、時代に翻弄された役者たちの苦悩など、多角的に分析。中国文化遺産「変面」継承者である著者が、経済・政治・教育の文脈において文化資源化されている川劇の動態を、実体験を交えつつ文献調査やフィールドワークを用いて論じた貴重な成果。詳細な歴史的展開を概説した「付録　四川省と川劇の歴史」を付す。
【本書の特色】・経済・政治・教育の3視点から現代川劇の意義・役割を明らかにする。・川劇の歴史的展開を知ることができる。・華やかな川劇の舞台写真60点をカラー掲載。

A5判上製・224頁・2023年3月刊行
978-4-585-37007-9・定価7480円（税込）

輞川図と蘭亭曲水図
イメージとテクストの交響

野田麻美・静岡県立美術館[編]

東アジアにおける文学・書・画の世界を考えるうえで、とりわけ重厚な二つの画題――「輞川図」と「蘭亭曲水図」。文人画の祖とされる王維、書聖として崇められる王羲之にまつわる故事を絵画化するなかで、園林を舞台とする文人たちの交流はいかにして描かれ、その風景表現はどのように展開したのか。
2021年に修理を終えた静岡県立美術館所蔵の「輞川図巻」をはじめ、近年注目を集める「蘇州片」や、久隅守景、池大雅、富岡鉄斎らの優品など、中国と日本、そして、宋代から近代に至るまでの王維・王羲之イメージを精査・検討。
諸分野の第一線の研究者による論考とカラー図版を含む120点超の書画資料より、イメージとテクストの連環が織りなすダイナミックな世界を照らし出す。

A5判上製・304頁・2023年4月刊行
978-4-585-37009-3・定価10450円（税込）

文と書
中国書字思想の探究

亀澤孝幸[著]

近代以前の中国において、「書」は文学や絵画と並ぶ最高の芸術とみなされていた。文字をつかさどることは世界の統治と同等の意味を有し、この根源的な政治性とあいまって、文字や言葉を記す「書」は中国文化における重要な地位を占めるに至った。書論のみならず文字学、言語哲学、文学論、画論など文字や書くことに関する諸種のテクストを相互に接続、交差させることで、「文字を書くこと」に関する思想――書字思想の体系を明らかにする。近代以降に形成された造形芸術としての片面的な評価を改め、「書字」という人間の普遍的な営みから「書」の意義を捉えかえす意欲作。

A5判上製・288頁・2023年3月刊行
978-4-585-37008-6・定価8800円（税込）

野村太一郎の狂言入門

野村太一郎・杉山和也[著]

狂言って難しい？どうやって見たらいい？
どんなストーリーなの？
狂言のことば・しぐさの見方、知っておきたいおすすめ作品、演者ならではの舞台の裏話など、狂言を楽しむためのエッセンスをたくさんの撮り下ろし写真とともに徹底解説！
新進気鋭の狂言師・野村太一郎によるとっておきの狂言入門！

・初心者でも親しみやすい「柿山伏」・「附子」の台本に現代語訳、舞台写真・豆知識をそえてわかりやすく紹介！
・能や歌舞伎との違いとは？狂言もユネスコ無形文化遺産なの？知っておきたい狂言に関する基礎知識を網羅！
・師匠・野村萬斎や、亡き父・五世野村万之丞（八世野村万蔵）など多くの名人たちとのエピソードも満載！

A5判並製・224頁・2023年7月刊行
978-4-585-37005-5・定価3080円（税込）

重要文化財
東福寺 五百羅漢図
修理と研究

石川登志雄［編］

「画聖」と称された室町期を代表する絵仏師・吉山明兆の超大作「五百羅漢図」。
大本山東福寺所蔵の47幅（45幅・附2幅）及び根津美術館所蔵の2幅についての16年の長期にわたる保存修理の成果とその下絵50幅、さらに長らく所在不明とされてきたが、近年、ロシア・エルミタージュ美術館に所蔵されていることが明らかになった第50号を大判のカラー図版により掲載。また、調査の過程により見出された新知見、装?修理における試行錯誤の成果を示した論考・コラム、諸種の資料も収載し、これまで全貌が未紹介であった東福寺五百羅漢図の研究に重要な材料を提供する。日本文化史・美術史・仏教史・文化財学をはじめ諸分野に益する瞠目すべき一書！

B4判上製・276頁・2023年10月刊行
978-4-585-37010-9・定価24200円（税込）

博物館情報学入門

E Orna & Ch. Pettitt=著
安澤秀一=監修／水嶋英治=編訳

博物館・美術館の文化情報資源の有効活用のために情報学の立場から論じた名著、待望の邦訳！

※『博物館情報学入門』（ISBN978-4-585-00172-0）（2003年6月刊行）のオンデマンド版となります。

オンデマンド版・アートドキュメンテーション叢書2・A5判並製・256頁・
2023年9月刊行・978-4-585-80172-6・定価3850円（税込）

物語る仏教絵画
童子・死・聖地

山本陽子［著］

日本中世において数多く制作された仏教絵画のなかで、類例のない図様を持ち、制作当時とは異なる名称で呼ばれたり、別の信仰の文脈で語られてきたりした経緯をもつ、特異な仏画が存在する。これらはどのような意図で制作され、何を意味しているのか。そして、なぜ多種多様な形態や伝説を持っているのか。とりわけ「童子・死・聖地」にまつわるこれらの仏画や垂迹画を丹念に読み解き、図像的特徴や成立背景、制作意図を明らかにする。さらに、これらの仏教絵画が制作された時点における、伝承や説話からの影響関係、受容の様相を探る。美術史学・説話文学・民俗学研究など隣接諸学に寄与する研究成果。

A5判上製・616頁・2023年10月刊行
978-4-585-37011-6・定価11000円（税込）

国宝「三十帖冊子」
修理から見えてきたもの

宇都宮啓吾［編］

弘法大師空海が、当地の仏教経典・儀軌類を書写し、日本に随身秘蔵してきた冊子本、国宝「三十帖冊子」。第六世守覚法親王の時代より京都・仁和寺にて尊ばれ、伝持されてきた同書は、空海の入唐中の学問のありかたを伝える密教将来の至宝として、また、空海や橘逸勢ほか、多くの唐の写経生がその書写に関わり、かつ粘葉装の日本最古の例として、特筆すべき文化財的意義を有している。国宝「三十帖冊子」は、どのように守られ、伝えられてきたのか。6か年の歳月をかけて行われた修理の全容と、それによって見えてきた新知見を多くのカラー図版とともに紹介。さらには、「三十帖冊子」の伝来と流転、奈良朝経典訓読や漢籍訓読の諸問題、空海の学問と書、高解像度デジタル顕微鏡による料紙分析と写本学とのコラボレーション、文化財修理のこれまでとこれから等、多角的な観点から「三十帖冊子」を把捉する決定版。掲載図版300点超！

A5判上製・326頁・2023年12月刊行
978-4-585-31012-9・定価13200円（税込）

紙のレンズがひらく
古典籍・絵画の世界

New Aspect of Codicology,
under the eyes of the
Scientific Analysis of Paper

江南和幸・佐藤悟・横井孝［編］

古典籍や絵画、文書など、東アジアには紙を基底材とした文化財が数多く伝来している。そこで使用される紙は、原料や加工処理により、さまざまな表情を残している。これらの紙は、どのように作られ、選択され、流通したのか。文学的・書誌学的・文献学的研究と、高性能デジタル顕微鏡観察や蛍光X線分析による非破壊科学的分析研究とを一体とした「新コディコロジー」により、紙そのものが持つ情報と、その背景にある歴史・社会・経済・政治といった文化状況までもが明らかになりつつある。料紙研究の最先端を伝え、また、これからの課題をも提示する貴重な一冊。
掲載図版200点超！

A5判並製・284頁・2023年11月刊行
978-4-585-39036-7・定価4950円（税込）

訂正新版
図説 書誌学
古典籍を学ぶ

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫［編］

有史以来蓄積されてきた「書物」は、人間の英知・思想・思考・情感といった精神活動が、最も明瞭に集約・表出されたかたちで伝承されてきた、学術文芸の遺産である。この「書物」は、なぜここにこのように存在するのか――。「書物」との真摯な対話により、過去から現在、そして未来へと連なる人間の知的営みの一端に自らリンクすることが出来るのである。昭和35年の開設以来、書誌学の専門研究所として学界をリードしてきた斯道文庫所蔵の豊富な古典籍の中から、特に書誌学的観点から重要なものを選出。豊富なカラー図版・解説を通覧することで、書誌学の理念・プロセス・技術を学ぶことが出来る。巻末には「書誌学用語索引」を附し、レファレンスツールとしても充実。古典籍を知る資料集として必備の一冊。掲載図版270点以上！

※本書は『図説　書誌学』（2010年12月刊行）の訂正新版です。

A4判並製・224頁・2023年11月刊行
978-4-585-30010-6・定価3850円（税込）

古文書修復講座
歴史資料の継承のために

神奈川大学日本常民文化研究所［監修］
関口博巨［編］

日本においては、歴史を伝える資料、特に古文書・古記録などの紙の資料が多く残されている。これらは博物館や資料館、図書館などで管理されているもののみならず、民家の母屋や土蔵の奥深く、さらには襖の中の下張りとして残され、虫損・破損・水損など、さまざまなリスクに囲まれている。傷んでしまった紙資料にはどのように対処するのか。また、それらの資料はどのように整理するのか。
長年にわたり、古文書の調査のみならず保存・整理の方法論を検討し、歴史資料の取り扱いかたのレクチャーを行ってきた神奈川大学日本常民文化研究所のノウハウ・知見を、豊富なカラー写真とともに余すところなく紹介。
博物館・資料館・図書館等、古文書を取り扱う方々に必携の書。

B5判並製・192頁・2024年2月刊行
978-4-585-32035-7・定価4180円（税込）

楷書の秘密
「字様」が発見されるまで

西原一幸［著］

類似する楷書を広く弁別するために編纂された典籍「字様」。字書とは異なる性格・構成をもつそれは、科挙制度とも深く結びつきながら楷書字形のあるべき姿を決めていった。
筆者の発見した典籍『正名要録』『群書新定字様』の精査から浮かんでくる「字様」という概念を紹介する。また『説文解字』の検討により、楷書の歴史を整理し、字体の規定の有り様を明らかにするとともに、「楷書」という東アジア漢字文化圏を支える文字体系の解明を目指す。

四六判並製・208頁・2024年2月刊行
978-4-585-38005-4・定価4180円（税込）

「見える」ものや「見えない」ものをあらわす

東アジアの思想・文物・藝術

外村中・稲本泰生［編］

「見える」／「見えない」を論じること、それらを描き出すこと——。宗教や思想、芸術などの人間の営みは、このことが大変重要かつ普遍的なテーマであることを示している。東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、「見えるもの／見えないもの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求。宗教・思想をはじめ、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ様々な論点を、最先端の研究者24名の視角により提示する画期的論集。

B5判上製・746頁・2024年3月刊行
978-4-585-37012-3・定価15400円（税込）

器と信仰

東アジアの舎利荘厳をめぐる
美術史・考古学からのアプローチ

加島勝［編］

釈迦の遺骨として、アジア各地で篤い信仰を集める「舎利」。その容れ物である舎利容器は、特定の用途を持つ器形や、別の文脈で意味を成した図像が複合的に組み合わされ、舎利を荘厳する器として仕立て上げられた。それゆえ、「器のかたち」——どこで、どのような器の形状・素材・図様が採用されてきたのかという問題は、「舎利の意味」——舎利が各地域の社会においてどのような存在として受容されたのかということと相関関係を有している。中国・日本・韓国・ベトナムの実地調査を礎とした、舎利及びその荘厳に関する最新の知見を提示。また、資料編では、現地調査にて得られた作例の基礎データ、また、舎利荘厳における大きな画期である仁寿舎利塔の網羅的調査記録を提示、貴重な画像資料も収載した。美術史学界・考古学界のみならず、日本及び東洋の文化史に関わる領域に広く寄与する画期的成果。

B5判上製・460頁・2024年3月刊行
978-4-585-32041-8・定価16500円（税込）

中国古典戯曲演劇論

岡晴夫［著］

構成やしぐさ、舞台の演出効果に焦点を当てた中国元曲論、通俗の面白さは何かを追究した劇作家・李漁論、豊富な歴史や知識と観劇体験に裏打ちされた京劇論の三部構成による珠玉の論文集。独特の軽妙洒脱な文体で綴り、文学・文芸の本質を考察し続けた中国文学研究者の軌跡。

A5判上製・504頁・2024年4月刊行
978-4-585-37015-4・定価16500円（税込）

戦後出版文化史のなかのカストリ雑誌

石川巧［編集代表］カストリ雑誌編集委員会［編］

戦後占領期の紙飢饉に乗じて登場した仇花のような出版物＝カストリ雑誌。戦後出版文化の領域において必ず言及される事項であり、そのいかがわしさ、偽物性において、まさに戦後占領期を象徴する言葉のひとつとして機能していたものの、その実態については明らかになっていない部分が多くある。戦後、占領軍の検閲が厳しかった時代、大衆通俗雑誌であるがゆえに、人々の欲望の本質と実態を暴くことができ、一世を風靡するほど人気を集めたカストリ雑誌が、なぜどこにも保存されないまま人々の記憶の片隅に追いやられてしまったのか？カストリ雑誌は戦後の雑誌出版文化にどのような役割を果たしたのか？そもそもカストリ雑誌とは何だったのか？カストリ雑誌主要30誌を解説、またそれらにまつわるコラムを収録。戦後占領期におけるカストリ雑誌の全貌を明らかにする。

A5判並製・208頁・2024年5月刊行
978-4-585-39039-8・定価3080円（税込）

増補改訂版
図像学入門
疑問符で読む日本美術

山本陽子［著］

麗子像はどうしてあんなこわい顔？ 足なし幽霊は応挙から？ 釈迦の托胎は「受胎告知」と似てる？ 絵画や仏像などのさまざまな疑問・謎を図像解釈学（イコノロジー）から探り、日本美術の新しい楽しみ方を提案する。新たに8つのトピックを追加し、増補改訂版として刊行。

※本書は『図像学入門――疑問符で読む日本美術』（2015年11月刊行）の増補改訂版です。

四六判並製・272頁・2024年4月刊行
978-4-585-37014-7・定価2640円（税込）

和紙を科学する
製紙技術・繊維分析・文化財修復

大川昭典［著］

古文書・古典籍・絵画など、日本には「紙」の文化財が数多く残されている。これらの料紙には、どのような材料が使用され、どのような漉き方、加工が施されたのか。また、色や大きさを選定する背景には、どのような価値観があったのか――。紙はその当時の人びとの心性や文化体系をいまに伝える貴重な史料である。それらの文化財を守り、伝えていくためには、基盤となる紙の調査・分析を欠くことができない。40数年に及び、先駆的に紙の文化財の調査・科学的分析に関わり、料紙の材料や構造、製法の研究において、数多くの実績を残し、修理用紙の作成、料紙の復元などにも尽力してきた著者の知見を初めて集成。現在、大きな展開を見せている「紙」の研究の基盤と歩みを提示する画期的な一冊。
図版掲載点数250点超。

B5判並製・264頁・2024年7月刊行
978-4-585-35002-6・定価4620円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024
美術・芸術

世界の絵本・作家 総覧

O.L.V.（おおぶ文化交流の杜図書館ボランティアグループ）
おおぶ文化交流の杜図書館［編］

絵本大国アメリカ、イギリスはもとより、アジア、中南米諸国、アフリカといった、これまで紹介される機会が少なかった地域も含め、約80カ国の絵本・作家を15のセクションに分けて紹介。19世紀から現代にわたる総勢900名以上の絵本作家の略歴と、翻訳されている作品のリストを掲載。また、昔話や民話、各国を舞台にした絵本のリストなども収録。世界の絵本・作家を一望できる待望の一冊、ここに刊行！

B5判上製・1240頁・2024年6月刊行
978-4-585-30013-7・定価22000円（税込）

アーカイブズ学入門

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館［編］

国立公文書館が認証アーキビスト制度を開始し、アーカイブズ学教育の重要性はますます高まっている。これと並行して各大学・大学院でもアーカイブズ学教育を行うところは次第に増加している。現代社会におけるアーカイブズの意義とは何なのか。アーキビストとはどのような職務で、どのような心構えが必要なのか。アーカイブズの定義、意義、原則、基本用語、組織やアーキビストなどについての基本知識を、多数の図版・写真とともにわかりやすく解説。これからアーカイブズ学を学ぶ人たちのための、必携の入門書！

公文書を含む記録史料の収集、整理、保存、利用等に関する専門的知識と技術の普及を目的として、国文学研究資料館が開催している「アーカイブズ・カレッジ」。その連続講義の初めての書籍化。

A5判並製・256頁・2024年7月刊行
978-4-585-30012-0・定価3080円（税込）

デジタル時代のコレクション論

中村覚・逢坂裕紀子［責任編集］

デジタルコンテンツの収集、保存、活用を巡る諸問題に対処するには、異なる分野のステークホルダー間の協力が不可欠である。既に多くの分野で進められている取り組みを踏まえ、コンテンツの収集、保存、活用に関連する概念や理論を総合的に検討。また、ネットワークを通じたコレクションの構築、マイクロコンテンツの活用など、現代における具体的な事例を提示し、さらにこれまでの理論と実践を基に、デジタルコンテンツの収集、保存、活用に関するさらなる議論を展開する。

デジタルアーカイブ・ベーシックス・A5判並製・304頁
2024年10月刊行・978-4-585-30304-6・定価3850円（税込）

源氏絵研究の最前線

稲本万里子［編著］

『源氏物語』を絵画化した作品である源氏絵は、平安時代から現代に至るまで数多く制作された。これらは、歴史上、天皇や公家、武家、あるいは寺院の僧侶たちの私的な空間を彩る絵であったため、彼らの生活を知るためには、欠くことのできない作品である。そして、その制作には土佐派や狩野派などさまざまな流派が関わり、流派を超えた同時代の潮流や、あるいは時代を超えた流派ごとの様式展開を知るための重要な作例でもある。絵巻や扇、画帖、?風など、さまざまな形で残されてきた作品を、美術史、建築史、日本文学などの知見より時代別に考察。さらには、AIやVRなどを駆使した最先端の研究や展示方法に関する最新成果も収載。日本古典文化の中心にある『源氏物語』の絵画の世界を多角的視点から解剖した必備の一冊。図版点数360点超！

B5判上製・488頁・2024年10月刊行
978-4-585-37016-1・定価14300円（税込）

新装版
日本建築の歴史的評価とその保存

山岸常人［著］

私たちをとりまく社会・環境には、様々な時代に建てられた多種多様な建造物が混在している。これらの建造物は、過去から現在まで積み重ねられた記憶、即ち歴史の蓄積を伝えており、それらが残され、使い続けられることにより、生活を豊かで味わいのあるものとしている。歴史的建造物をどのように調査するのか、調査した建造物の特質をどのように読み取るのか、その特質を踏まえてどのように保存を行ってゆくべきなのか、その保存のための制度の課題は何か。長年にわたり調査・研究・保存に携わってきた知見より、歴史的建造物を保存し将来に伝えて行くための考え方と、その具体的な事例を提示する。

※本書は『日本建築の歴史的評価とその保存』（2020年2月刊行）の新装版です。

B5判並製・672頁・2024年8月刊行
978-4-585-32052-4・定価18700円（税込）

蘇州版画
東アジア印刷芸術の革新と東西交流

青木隆幸・板倉聖哲・小林宏光［編］

芸術文化の古い歴史を持ち、経済的繁栄をきわめていた17、18世紀の中国・蘇州市に生まれた「蘇州版画」。吉祥的な画題や教訓、歴史故事、名所旧跡、通俗文学や詩の絵解きなどさまざまな題材をとり上げ、当時の都市のにぎわい、市民の暮らしを大きな画面に描き伝える貴重な視覚資料でもある。技法も多彩で、濃淡の墨摺、複数色の色刷りと手彩色、また、舶載された西洋銅版画などの陰影法や透視図法も積極的に応用する。これらは江戸時代の長崎に大量にもたらされ、ヨーロッパにも輸出されて宮殿の室内を飾り、美術工芸品への応用が注目されてきた。中国版画史を突出して彩るその歴史と世界的広がりを、国内外の第一線の論者が多数の図版を交えて明らかにする貴重な一書。

2023年、海の見える杜美術館にて開催され、美術ファン・研究者に大きな衝撃を与えた『蘇州版画の光芒―国際都市に華ひらいた民衆芸術』展。そのエッセンスと関連シンポジウムの成果を収録。

アジア遊学295・A5判並製・320頁・2024年10月刊行
978-4-585-32541-3・定価3520円（税込）

廃墟の文化史

木下華子・山本聡美・渡邉裕美子［編］

近代産業遺産、廃業した遊園地やホテル、廃村や廃校など、現代において「廃墟」はたびたびブームとなり、人々の心を強く惹きつける。そしてひとたび、古典の世界に目を向ければ、古都や古代寺院の遺構、絵画・記録・物語や伝承などに遺された荒廃した町並みや建造物など、さまざまな廃墟表象が見いだせる。「廃墟」はなぜ描かれ、語り継がれたのか。そこにはどのようなイメージ、意図が込められていたのか。人々は「廃墟」に何を託したのか――。これまであまり考察されることのなかった、日本の廃墟表象を捉え直し、文学・美術・芸能など様々な視点から、古代以来連綿と人々が廃墟と共存した様相や、廃墟が文化の再生・胚胎を可能とする機能的な場であることを明らかにする。日本の歴史・文化史に立脚した廃墟をめぐる新たな視座を提供する挑戦。

アジア遊学297・A5判並製・288頁・2024年11月刊行
978-4-585-32543-7・定価3300円（税込）

帝鑑図と帝鑑図説

日本における勧戒画の受容

小助川元太・薬師寺君子・野田麻美・水野裕史［編］

古来、中国そして東アジア各国においては為政者がいかにあるべきかを説くために、他者や過去の出来事を鑑として戒めとすべき手本を示した「勧戒画（鑑戒画）」が利用されてきた。なかでも中国帝王にまつわる故事を取り上げたものは「帝鑑図」と称され、屏風や障壁画など室礼や儀礼空間の荘厳として、また、挿絵となり物語と共に『帝鑑図説』として版本化され、東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。本書では、日本における帝鑑図・帝鑑図説の諸作品を美術史・文学研究の第一線の視点より、多角的に考察。通説を再検討し、「帝鑑図」とは何か、という基本的な定義を問い直す画期的成果。豊富な図版資料また国内作品の網羅的リストも具備した、東アジア文化史研究における必携の一冊！

A4判並製・432頁・2024年11月刊行
978-4-585-37017-8・定価16500円（税込）

道教文化と日本

陰陽道・神道・修験道

日本道教学会［編］

東王公・西王母、司命・司籍、泰山、雷神、太歳、竈神（庚申信仰）、墓葬壁画にみえる四神と仙人、神器としての鏡、剣、玉、民間に流伝した風習や伝説、術数、風水、医薬学……古来、日本文化の中には、様々な道教的な要素が見られる。道教は、いつどのように日本に伝来したのか。道教の東アジア的広がりは、日本にどのような影響をもたらしたのか。「道教的な要素」は、果たして本当に道教に由来していると言えるのか。由来や存在形態などに未だ不明な部分が多い、日本における「道教文化」。陰陽道、神道、修験道、そして仏教など、多角的な視点から文化要素の問題を再検討し、日本における需要のありかたや、日本文化への影響を解き明かす。

A5判並製・約300頁予定・2024年12月刊行予定
978-4-585-31020-4・予価4180円（税込）

勉誠社
刊行案内
2024

図書館情報学
アーカイブズ学
書誌学・本の本

本 かたちと文化

古典籍・近代文献の見方・楽しみ方

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館［編］

写本、版本、明治期に作られた書籍――
日本の古い本には色々な形があり、それを構成する部品、作られた時代も様式も様々である。これらの「本」には何が書かれているのか。そもそも「本」のどこをどのように見ればよいのか。くずし字はどう読めばよい？捺されているハンコは何を意味しているのか？表紙の模様にはどのような意味が隠されているのか？一流の研究者たちが丁寧にわかりやすく解説する。多数の図版とともに楽しむ、充実の古典籍・近代文献の入門書！ 古典籍研究のエキスパートである国文学研究資料館が定期的に開催し、書物の声を聴くための方法・視角をレクチャーする「日本古典籍講習会」。そこで繰り広げられる連続講義を初めて書籍化。

※フルカラー電子版は勉誠社ホームページからお買い求めいただけます。

A5判並製・288頁・2024年2月刊行
978-4-585-30011-3・定価3080円（税込）

古文書修復講座

歴史資料の継承のために

神奈川大学日本常民文化研究所［監修］
関口博巨［編］

日本においては、歴史を伝える資料、特に古文書・古記録などの紙の資料が多く残されている。これらは博物館や資料館、図書館などで管理されているもののみならず、民家の母屋や土蔵の奥深く、さらには襖の中の下張りとして残され、虫損・破損・水損など、さまざまなリスクに囲まれている。傷んでしまった紙資料にはどのように対処するのか。また、それらの資料はどのように整理するのか。
長年にわたり、古文書の調査のみならず保存・整理の方法論を検討し、歴史資料の取り扱いかたのレクチャーを行ってきた神奈川大学日本常民文化研究所のノウハウ・知見を、豊富なカラー写真とともに余すところなく紹介。
博物館・資料館・図書館等、古文書を取り扱う方々に必携の書。

B5判並製・192頁・2024年2月刊行
978-4-585-32035-7・定価4180円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学

古典籍の文献学

鶴見大学図書館の蒐書を巡る

編集部［編］

『伊勢物語』、『源氏物語』などの物語、歌集・歌学書、古筆切、仏書、漢籍、洋学資料…。鶴見大学図書館では、文献資料に基づく実証的研究を伝統とし、その時々の教職員の書物に対する深い関心と集書への熱意によって徐々に貴重な古典籍が蒐集されてきた。そのコレクションは全国でも屈指の収蔵点数を誇っており、まさに「宝庫」と呼ぶに相応しい。鶴見大学図書館が70年の長きにわたり、博捜と収蔵に取り組み続け、守り伝えてきた営為とその魅力をあますところなく紹介する。

書物学25・B5判並製・120頁・2024年3月刊行
978-4-585-30725-9・定価2200円（税込）

戦後出版文化史のなかのカストリ雑誌

石川巧［編集代表］カストリ雑誌編集委員会［編］

戦後占領期の紙飢饉に乗じて登場した仇花のような出版物＝カストリ雑誌。戦後出版文化の領域において必ず言及される事項であり、そのいかがわしさ、偽物性において、まさに戦後占領期を象徴する言葉のひとつとして機能していたものの、その実態については明らかになっていない部分が多くある。戦後、占領軍の検閲が厳しかった時代、大衆通俗雑誌であるがゆえに、人々の欲望の本質と実態を暴くことができ、一世を風靡するほど人気を集めたカストリ雑誌が、なぜどこにも保存されないまま人々の記憶の片隅に追いやられてしまったのか？カストリ雑誌は戦後の雑誌出版文化にどのような役割を果たしたのか？そもそもカストリ雑誌とは何だったのか？カストリ雑誌主要30誌を解説、またそれらにまつわるコラムを収録。戦後占領期におけるカストリ雑誌の全貌を明らかにする。

A5判並製・208頁・2024年5月刊行
978-4-585-39039-8・定価3080円（税込）

アーカイブズ学入門

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館［編］

国立公文書館が認証アーキビスト制度を開始し、アーカイブズ学教育の重要性はますます高まっている。これと並行して各大学・大学院でもアーカイブズ学教育を行うところは次第に増加している。現代社会におけるアーカイブズの意義とは何なのか。アーキビストとはどのような職務で、どのような心構えが必要なのか。アーカイブズの定義、意義、原則、基本用語、組織やアーキビストなどについての基本知識を、多数の図版・写真とともにわかりやすく解説。これからアーカイブズ学を学ぶ人たちのための、必携の入門書！

公文書を含む記録史料の収集、整理、保存、利用等に関する専門的知識と技術の普及を目的として、国文学研究資料館が開催している「アーカイブズ・カレッジ」。その連続講義の初めての書籍化。

A5判並製・256頁・2024年7月刊行
978-4-585-30012-0・定価3080円（税込）

和紙を科学する

製紙技術・繊維分析・文化財修復

大川昭典［著］

古文書・古典籍・絵画など、日本には「紙」の文化財が数多く残されている。これらの料紙には、どのような材料が使用され、どのような漉き方、加工が施されたのか。また、色や大きさを選定する背景には、どのような価値観があったのか――。紙はその当時の人びとの心性や文化体系をいまに伝える貴重な史料である。それらの文化財を守り、伝えていくためには、基盤となる紙の調査・分析を欠くことができない。40数年に及び、先駆的に紙の文化財の調査・科学的分析に関わり、料紙の材料や構造、製法の研究において、数多くの実績を残し、修理用紙の作成、料紙の復元などにも尽力してきた著者の知見を初めて集成。現在、大きな展開を見せている「紙」の研究の基盤と歩みを提示する画期的な一冊。
図版掲載点数250点超。

B5判並製・264頁・2024年7月刊行
978-4-585-35002-6・定価4620円（税込）

勉誠社
新刊案内
2024
書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学

世界の絵本・作家 総覧

O.L.V.（おおぶ文化交流の杜図書館ボランティアグループ）
おおぶ文化交流の杜図書館［編］

絵本大国アメリカ、イギリスはもとより、アジア、中南米諸国、アフリカといった、これまで紹介される機会が少なかった地域も含め、約80カ国の絵本・作家を15のセクションに分けて紹介。19世紀から現代にわたる総勢900名以上の絵本作家の略歴と、翻訳されている作品のリストを掲載。また、昔話や民話、各国を舞台にした絵本のリストなども収録。世界の絵本・作家を一望できる待望の一冊、ここに刊行！

B5判上製・1240頁・2024年6月刊行
978-4-585-30013-7・定価22000円（税込）

ラテンアメリカ文学の出版文化史

作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成

寺尾隆吉［編著］

カブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』、フアン・ルルフォ『ペドロ・パラモ』、フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』…。文学史に名を残す作家たちの作品はどのように刊行・宣伝され、スペイン語圏のみならず、世界中でブームを巻き起こしたのか？各国の出版事情や、書籍・雑誌の流通を考察することで、ラテンアメリカ文学が国際的に認識されていく過程を解き明かし、創作のあり方のみならず、出版文化史における編集者や出版社の役割を詳述した画期的な一冊。

A5判並製・320頁・2024年5月刊行
978-4-585-39040-4・定価6050円（税込）

デジタル時代の
コレクション論

中村覚・逢坂裕紀子［責任編集］

デジタルコンテンツの収集、保存、活用を巡る諸問題に対処するには、異なる分野のステークホルダー間の協力が不可欠である。既に多くの分野で進められている取り組みを踏まえ、コンテンツの収集、保存、活用に関連する概念や理論を総合的に検討。また、ネットワークを通じたコレクションの構築、マイクロコンテンツの活用など、現代における具体的な事例を提示し、さらにこれまでの理論と実践を基に、デジタルコンテンツの収集、保存、活用に関するさらなる議論を展開する。

デジタルアーカイブ・ベーシックス・A5判並製・304頁
2024年10月刊行・978-4-585-30304-6・定価3850円（税込）

図書館員をめざす人へ
増補改訂版

後藤敏行［著］

皆さんは、図書館員がどのような仕事をするか知っていますか？また、どうすればなれるか知っていますか？本書は図書館で働きたい皆さんを、基礎知識から実践まで、じっくりガイドします。図書館員へのインタビューも掲載、現場の声を届けます。初版から新たに合格体験記、海外のライブラリアンへのインタビューを追加。図書館員になるためのガイドブック＆インタビュー集の決定版！

※本書は『図書館員をめざす人へ』（2016年4月）の増補改訂版です。

ライブラリーぶっくす・四六判並製・296頁・2024年10月刊行
978-4-585-30014-4・定価2640円（税込）

勉誠社
Benseisha

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-18-4 徳栄ビル4F
WEBSITE=https://bensei.jp/ E-mail=info@bensei.jp
TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025